Machine Translated by Google

LINDA SUE PARK

NEWBERY MEDALIST FOR *A SINGLE SHARD*

A LONG WALK TO WATER

BASED ON A TRUE STORY

Machine Translated by Google

水までの長い散歩

ベース

オン•ア

実話

リンダ•スー•パーク

Machine Translated by Google

クラリオンブックス

ホートン ミフリン ハーコート

ボストン |ニューヨーク | 2010年

Machine Translated by Google

Machine Translated by Google

クラリオンブックス

215 Park Avenue South、ニューヨーク、ニューヨーク州10003 Copyright © 2010 by Linda Sue Park

テキストは11.5/19セレスティアアンティクアと12/19ルアーブルラウンドドライトに設定されました。

無断転載を禁じます。

本書からの抜粋を複製する許可については、次の宛先までご連絡ください。

許可、Houghton Mifflin Harcourt Publishing Company、215 Park Avenue South、New York、New York 10003。

Clarion Books は、Houghton Mifflin Harcourt Publishing Company の出版物です。

www.hmhbooks.com

議会図書館出版目録データパーク、リンダ

訴える。

水までの長い散歩 : 実話に基づく / リンダ•スー•パーク著。

p. cm。

概要: 1985 年、スーダン内戦が彼の村にまで及ぶと、11 歳のサルバは家族とはぐれ、安全な避難場所を求めて他のディンカ族のメンバーとともにスーダン南部、エチオピア、ケニアを歩かなければなりません。サルバ•ダットの生涯に基づいたもの。

アメリカ

1996年にスーダンで井戸を掘るプロジェクトを開始した。 ISBN 978-0-547-25127-1

1. ダット、サルバ、1974?—青少年向けフィクション。 [1.ダット、サルバ、1974?—フィクション。

2. 難民—フィクション。 3. サバイバル—フィクション。 4. 水—フィクション。 5. 黒人—スーダン - フィクション。

6. スーダン—歴史—内戦、1983 〜 2005 年—フィクション。] I. タイトル。

PZ7.P22115Lo 2009

[Fic]—dc22

Machine Translated by Google

2009048857

米国で製造

QFF 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

4500253890

ベンヘ、また

Machine Translated by Google

第一章

スーダン南部、2008 年

行くのは簡単でした。

大きなプラスチックの容器には空気しか入っていませんでした。 11歳にしては背が高いニャは、ハンドルを片手からもう一方の手へ持ち替えたり、容器を横で振り回したり、両腕で抱えたりすることができた。彼女はそれを後ろに引きずり、地面にぶつけて、一歩ごとに小さな塵の雲を巻き上げることさえできました。

重量はほとんどありませんでした。暑さだけがあり、正午よりずっと前だったにもかかわらず、太陽がすでに空気を焼いていました。途中で止まらなかったら、午前の半分はかかるだろう。

熱。時間。そして棘。

スーダン南部、1985年

サルバはベンチにあぐらをかいて座っていた。彼は頭を正面に向け、手を組み、背中を完全にまっすぐに保ちました。彼の目と心以外のすべてが、先生に注意を向けていました。

彼の目は窓の方をちらちらと動かし続け、そこから道路が見えた。帰り道。もう少しだけ　あと数分
そして彼はその道を歩いていることになる。

先生はアラビア語についての授業をダラダラと続けた。
サルバさんは自宅でディンカ族の言語を話していました。しかし学校では、はるか北にあるスーダン政府の公用語であるアラビア語を学んだ。最後の誕生日の時点で11歳だったサルバは、優秀な学生だった。彼はその教訓をすでに知っていたので、体より先に心をさまよわせていたのです。

Machine Translated by Google

サルバさんは、学校に通えることがどれほど幸運であるかをよく知っていました。
乾季には家族が村を離れたため、彼は一年中出席することができませんでした。しかし、雨季の間は、自宅からわずか30分の距離にある学校まで歩いて通うことができた。

サルバの父親は成功者でした。彼は多くの牛の頭を所有し、村の裁判官として働いていました。これは名誉ある、尊敬される地位でした。サルバには 3 人の兄弟と 2 人の姉妹がいました。少年たちはそれぞれ約10歳の年齢に達すると、学校に送り出されました。サルバの兄、アリクとリングはサルバより先に学校に通っていました。去年はサルバの番だった。彼の二人の妹、キットとアグナスは学校に通っていませんでした。村の他の女の子たちと同じように、彼女たちは家にいて、母親から家事の仕方を学びました。

サルバさんはほとんどの場合、学校に通えることをうれしく思っていました。しかし、いくつかの
まだ家に帰って牛の世話をしていればよかったと思った日々だった。

彼と彼の兄弟たち、そして父親の他の妻の息子たちも、
彼らは群れと一緒に水場まで歩いて行きました、そこには良い放牧がありました。彼らの責任は彼らの年齢によって異なりました。サルバさんの弟、クオルさんはたった1頭の牛の世話をしていた。以前の兄弟たちと同じように、彼は毎年さらに多くの牛を担当することになりました。サルバが学校に通い始める前、彼は群れ全体の世話を手伝い、弟の世話も手伝いました。

少年たちは牛を見張らなければなりませんでしたが、牛たちは実際にはそうではありませんでした
十分な注意が必要です。それでプレイする時間は十分に残った。

サルバと他の少年たちは粘土で牛を作りました。牛が増えれば増えるほど、
作れば作るほど、あなたはより豊かになりました。しかし、彼らは元気で健康な動物でなければなりませんでした。粘土の塊を立派な牛のように見せるには時間がかかりました。少年たちは、誰が最も多く、最高の牛を作ることができるかを競い合いました。

Machine Translated by Google

また、弓矢を使って小動物や鳥を射る練習をすることもありました。彼らはまだあまり上手ではありませんでしたが、時々幸運に恵まれました。

最高の日々でした。そのうちの一人がジリスやウサギ、モルモット鶏やライチョウを殺すことに成功すると、少年たちの目的のない遊びは止まり、突然やるべきことがたくさん増えました。

中には火を起こすために木を集めた人もいました。他の人は動物の掃除や服の着せ替えを手伝いました。それから彼らはそれを火で焼きました。

いずれも静かに行われたものではありません。サルバは、火の起こし方や肉の調理に必要な時間について自分の意見を持っており、他の人たちも同様でした。

「火はもっと大きくする必要がある。」

「これでは長くは続かないでしょう。もっと木材が必要です。」

「いえ、もう十分大きくなりましたよ」

「早く、崩れる前にひっくり返して！」

肉汁が滴り落ちてジュウジュウと音を立てる。おいしい香りが空気に満ちていました。

ついに、一秒たりとも待つことができなくなりました。男の子たちはそれぞれ数口食べるのに十分な量しかありませんでしたが、ああ、その一口はなんと美味しかったことでしょう。

サルバは唾を飲み込み、目を先生に戻した。彼は、あの時のことを思い出さなければ良かったと思った。なぜなら、思い出すとお腹が空いてしまうからだ…。
牛乳。彼は家に帰ると、一杯の新鮮な牛乳を飲み、夕食までお腹を満たしていました。

Machine Translated by Google

彼はそれがどうなるかを知っていた。彼の母親は仕事から立ち上がるだろう
食事を粉砕し、道路に面した家の側に歩き回ります。彼女は片手で目を隠して彼を探しました。
彼は遠くから彼女の鮮やかなオレンジ色のスカーフを見て、腕を上げて挨拶したものでした。彼が家に着くまでに、彼女は彼のためにミルクの入ったボウルを準備するために中に入っていたでしょう。

割れ目！

騒音は外から聞こえてきた。銃声だったのか？それともただの車のバックファイア？

先生は一瞬話すのをやめた。部屋中の全員の頭が窓の方を向いた。

何もない。沈黙。

教師が咳払いをすると、少年たちの注意は再び部屋の前に集まった。彼は中断したところからレッスンを続けた。
それから-

割れ目 !ポップポップクラック!

アック、アック、アック、アック、アック！

砲火！

「全員、ダウン！」先生は叫びました。

少年たちの何人かはすぐに動き出し、頭をかがめて前かがみになった。目と口を大きく開けて固まったまま座っている人もいた。サルバは両手で頭を覆い、パニックになって左右を見回した。

先生は壁に沿って窓の方へゆっくりと進んだ。彼はちょっと外を覗いてみた。銃声は止んだが、今度は人々が叫び、逃げ出した。

Machine Translated by Google

「皆さん、早く行きなさい」と先生は低く切迫した声で言った。 「藪の中へ。聞こえますか？家ではありません。家に逃げないでください。彼らは村に入るでしょう。村から離れて、藪に逃げてください。」

彼はドアのところに行き、再び外を眺めた。

「行け！全員、今すぐ！」

戦争は2年前に始まっていた。サルバさんはそれについてあまり理解していなかったが、彼と家族が住んでいたスーダン南部の反政府勢力が北部に拠点を置く政府と戦っていることは知っていた。北部に住んでいた人々のほとんどはイスラム教徒であり、政府はスーダン全土がイスラム教徒になることを望んでいた

国—イスラム教の信念が信奉されている場所。

しかし、南部の人々はさまざまな宗教を信仰しており、イスラム教の信仰を強制されることを望んでいませんでした。彼らは北からの独立を求めて戦い始めた。戦闘はスーダン南部全域に散らばり、今や戦争はサルバの住む地域にも及んでいた。

少年たちは慌てて立ち上がった。中には泣いている人もいた。の先生は生徒たちを急いでドアから出させ始めた。

サルバは列の最後尾近くにいた。彼は心臓が非常に激しく鼓動しているのを感じ、その脈動が喉と耳に脈打った。彼は「家に帰らなきゃ！家に帰らなきゃ！」と叫びたかったのです。しかし、その言葉は喉の激しい鼓動によって遮られた。

彼はドアに着くと外を見ました。誰もが走っていました、男性、子供たち、赤ん坊を抱いた女性たち。空気は走る足で巻き上げられた粉塵でいっぱいだった。中には叫びながら銃を振りかざす者もいた。

Machine Translated by Google

サルバはこれを一目で見抜きました。

それから彼も走っていました。彼は茂みの中に全力で走りました。

家から離れて。

第2章

スーダン南部、2008 年

ニャは容器を置き、地面に座りました。彼女はいつも、道沿いに生えているトゲトゲした植物を踏まないようにしていましたが、そのトゲが地面のいたるところに散らばっていました。

彼女は足の裏を見た。そこには大きなトゲがあった
かかとの真ん中で折れてしまいました。ニャはトゲの周りの皮膚を押した。それから彼女は別のとげを拾い上げ、それを使って最初のとげを突いたり突いたりしました。彼女は痛みに耐えながら唇を押しつけた。

スーダン南部、1985年

ブーム！

サルバは振り返って見た。彼の後ろで、巨大な黒い煙が立ち上った。その根元から炎が勢いよく噴き出した。頭上で、一機のジェット機が滑らかな邪悪な鳥のように方向転換した。

煙と砂埃の中で、校舎はもう見えませんでした。彼
つまずいて転びそうになった。もう振り返る必要はありません。それは彼の速度を遅らせた。

サルバは頭を下げて走った。

Machine Translated by Google

彼はもう走れなくなるまで走りました。それから彼は歩きました。太陽が空からほとんど消えてしまうまで、何時間も。

他の人たちも歩いていました。それらは非常に多かったので、全員が学校村出身というわけにはいきません。彼らはこの地域全体から来たに違いありません。

サルバが歩きながら、足取りのリズムに合わせて同じ考えが頭の中を巡り続けた。私達はどこに行くの ?私の家族はどこですか ?いつまた彼らに会えるでしょうか ?

暗くなりすぎて道が見えなくなると、人々は歩くのをやめた。でまず、誰もが不安げに周囲に立ち尽くし、緊張したささやき声で話したり、恐怖で沈黙したりしていました。

それから何人かの男性が集まり、しばらく話し合った。の一つ「村の皆さん、村ごとにグループ分けしてください。知り合いが見つかるでしょう。」

サルバは「ルン•アリク！ルーン•アリク村、ここです！」

安堵の気持ちが彼の中にあふれた。そこが彼の村だったのだ !彼はその声に向かって急いだ。

十数人がゆるやかなグループになって道端に立っていた。サルバは彼らの顔をスキャンした。彼の家族には誰もいなかった。赤ん坊を連れた女性、男性 2 人、10 代の少女など、何人かは見覚えがありましたが、よく知っている人は一人もいませんでした。それでも、彼らを見ていると安心しました。

彼らは道路のすぐそばで、男たちが交替で見張りをしながら、そこで一夜を過ごした。翌朝、彼らは再び歩き始めました。サルバさんは、ルン•アリクの他の村人たちと一緒に群衆の真ん中に留まりました。

午後の早い時間、彼は前方に大勢の兵士のグループが見えた。

Machine Translated by Google

「反逆者だ」という言葉が群衆に伝わった。反政府勢力、つまり政府と戦っていた人々。

サルバさんは道路脇で待機していた反乱軍兵士数名とすれ違った。それぞれ彼らのうちは大きな銃を持っていました。彼らの銃は群衆に向けられていなかったが、それでも兵士たちは獰猛で警戒しているように見えた。その後、反乱軍の一部が列の最後尾に加わった。今、村人たちは取り囲まれていました。彼らは私たちに何をするつもりですか？私の家族はどこですか？

その日の遅く、村人たちは反乱軍のキャンプに到着した。兵士たちは彼らを2つのグループに分けるよう命じた。一方のグループには男性が、もう一方のグループには女性と子供と高齢者が入った。サルバより数歳しか年上に見えない少年たちが男性グループに加わっていたため、10代の少年たちは男性とみなされていたようだ。

サルバは一瞬ためらった。彼はまだ11歳でしたが、彼は息子でした大切な家族の。彼は祖父の名前にちなんで名付けられた村出身のサルバ•マウィエン•ダット•アリクだった。父親はいつも彼に、男らしく行動するように、つまり兄たちの例に倣い、ひいてはクオルに良い模範を示すようにと言いました。

サルバは男たちに向かって数歩進んだ。

"おい！"

兵士がサルバに近づき、銃を構えた。

サルバは凍りついた。彼に見えたのは、銃が顔に向かって動いてくる、黒く光る巨大な銃身だけだった。

銃身の端が彼の顎に触れた。

サルバは膝が水になるのを感じた。彼は目を閉じた。

Machine Translated by Google

今死んだら家族には二度と会えない。

どういうわけか、この考えは彼を恐怖で倒れないように十分に力づけました。

彼は深呼吸をして目を開けた。

兵士は片手だけで銃を握っていた。彼はそれを狙っていたわけではない。彼はサルバの顎を持ち上げて顔をよく見るためにそれを使っていました。

「あそこだ」兵士は言った。彼は銃を動かして、次の方向に向けた
女性と子供のグループ。

「あなたはまだ男ではありません。そんなに急ぐ必要はありません！」彼は笑って、
サルバは肩を叩いた。

サルバは慌てて女性たちの側に駆け寄った。

翌朝、反乱軍はキャンプから移動した。村の男性たちは銃や迫撃砲、砲弾、無線機などの物資を運ぶことを強制された。
サルバさんは、ある男性が反乱軍に同行したくないと抗議するのを見ていた。兵士が銃の台尻で彼の顔を殴った。男は血を流して地面に倒れた。

その後、誰も反対しなくなりました。男たちは重機を担いでキャンプを後にした。

他のみんなもまた歩き始めた。彼らは反乱軍とは逆の方向に進んだ。反乱軍が行くところはどこでも、必ず戦闘が起こるからだ。

サルバさんはルン•アリクからのグループと一緒に滞在した。男性がいなくなって、今はさらに小さくなりました。そして、幼児を除いて、サルバは唯一の子供でした。

Machine Translated by Google

その夜、彼らは夜を過ごすための納屋を見つけました。サルバかゆい干し草の中に落ち着きなく放り込まれていました。

私達はどこに行くの ?私の家族はどこですか ?いつまた彼らに会えるでしょうか？

彼は眠りにつくまでに長い時間がかかった。

***

サルバは完全に目が覚める前から、何かがおかしいと感じていました。彼は目を閉じてじっと横たわり、それが何であるかを感じようとしました。

ついに彼は起き上がって目を開けました。

納屋には他に誰もいなかった。

サルバはあまりにも素早く立ち上がったので、一瞬めまいを感じた。彼は急いでドアに駆け寄り、外を眺めた。

誰でもない。何もない。

彼らは彼から離れていったのです。

彼は一人だった。

Machine Translated by Google

第 3 章

スーダン南部、2008 年

ニャが近づくにつれて地平線上の汚れは色を増し、霞んだ灰色からオリーブグリーンに変化した。彼女の足の下の土は泥になり、ヘドロになり、ついには足首まで水に浸かった。

池の周りにはいつもたくさんの生き物がいました。自分の容器を満たしに来た他の人々、ほとんどが女性と少女でした。たくさんの種類の鳥が羽ばたき、さえずり、鳴きます。世話をする若い少年たちによって良い放牧地に連れてこられた牛の群れ。

ニャーはプラスチック容器の取っ手に括り付けられていた、くりぬいたひょうたんを手に取りました。彼女はそれを解き、茶色の泥水をすくって飲みました。彼女が体の中が少し涼しくなったと感じるまでに、ひょうたん2杯かかりました。

ニャは容器を一番上まで満たしました。それから彼女は結びましたひょうたんは元の位置に戻り、ポケットからパッド入りの布製ドーナツを取り出しました。最初にドーナツが彼女の頭の上に乗り、次に水の入った重い容器を彼女は片手で所定の位置に持ち上げました。

頭の上で水のバランスが取れているが、足はまだ水の痛みで痛んでいる。とげとげ、ニャは家に帰るのは来るよりも時間がかかることを知っていました。しかし、すべてがうまくいけば、彼女は正午までに家に着くかもしれません。

スーダン南部、1985年

サルバの目には熱い涙が浮かんだ。みんなどこに行ったの？なぜ彼らは彼を起こさずに立ち去ったのでしょうか？

彼はその答えを知っていました。なぜなら、彼は子供だったからです。子供はすぐに疲れて子供たちの行動を遅くし、お腹が空くと不平を言い、何らかのトラブルを引き起こす可能性があるからです。

Machine Translated by Google

私なら何の問題もなかっただろうし、文句も言わなかったでしょう。 ...
これからどうすればいいでしょうか？

サルバは何が見えるかを確認するために数歩歩きました。遠い地平線の彼方には、空は爆弾の煙で霞んでいた。彼の前方百歩ほどのところに、小さな池が見えました。池と納屋の間に家があり、そう、女性が日向ぼっこに座っていた。

彼は息を止めて彼女の顔がはっきり見えるまで近づいた。
彼女の額にある儀式の傷の模様は見慣れたものだった。それはディンカ族の模様であり、これは彼女がサルヴァと同じ部族の出身であることを意味していた。

サルバは安堵の息を吐き出した。彼は彼女がヌエルでなくてよかったと思いました。
ヌエル族とディンカ族には長い問題の歴史がありました。どこからがヌエルの土地で、どこからがディンカの土地なのかは誰も分からないようだったので、各部族が水の最も豊かな地域を主張しようとした。長年にわたり、ディンカとヌエルの間で大小問わず多くの戦いがあった。双方の多くの人が殺された。これは現在進行中の反乱軍と政府の間の戦争とは異なりました。ディンカ族とヌエル族は何百年も戦い続けてきた。

女性は顔を上げて彼を見た。サルバは彼女の視線を見てひるんだ。
彼女は見知らぬ人に対しても友好的だろうか？彼女は納屋で一夜を過ごした彼に怒るだろうか？

しかし、少なくとも今彼は一人ではありませんでした、そしてその知識は、女性が彼に何をするか、何を言うかについての不確実性よりも強かったです。彼は彼女に向かって歩きました。 「おはよう、おばちゃん」彼は声を震わせながら言った。

彼女は彼にうなずいた。彼女は高齢で、サルバの母親よりもずっと年上でした。

彼は黙って彼女が話すのを待った。

「お腹が空いているんでしょうね」と彼女はついに言いました。彼女は立って中に入った家。しばらくして、彼女が戻ってきて、生のピーナッツを二掴み与えました。それから彼女は再び座りました。

Machine Translated by Google

「ありがとう、おばちゃん」サルバは彼女の隣でおしりをついてしゃがみ、ナッツの殻をむいて食べました。彼は飲み込む前にすべてのナッツを噛み砕いてペースト状にし、それぞれのナッツをできるだけ長持ちさせるように努めました。

女性は彼が終わるまで何も言わずに座っていた。それから彼女は尋ねました、
「あなたの人々はどこにいるのですか？」

サルバは話そうと口を開いたが、彼の目は再び涙でいっぱいになった。
そして彼は答えることができなかった。

彼女は顔をしかめた。 「あなたは孤児ですか？」

彼は急いで首を横に振った。一瞬、彼はほとんど怒りを感じた。彼がいた
孤児じゃないよ !彼には父親と母親がいて、家族がいたのです！

「私は学校にいた。戦闘から逃げてきた。家族がどこにいるのか分からない。」

彼女はうなずいた。 「ひどいことだ、この戦争は。どうするつもりだ　どうやって奴らを見つけるんだ？」

サルバには答えがなかった。彼はその女性が何らかの答えをくれるかもしれないと期待していた。結局のところ、彼女は大人でした。代わりに、彼女には疑問しかありませんでした。

すべてが逆さまだった。

その夜、サルバは再び女性の納屋に泊まりました。彼は、
プラン。もしかしたら、戦いが終わるまでここにいてもいいかもしれない。それから村に戻って家族を探します。

Machine Translated by Google

彼は彼女が彼を追い返さないように一生懸命働きました。 3日間、彼は藪から薪を汲み、池から水を汲みました。しかし、池は干上がっていました。毎日、ひょうたんをいっぱいにするのが難しくなりました。

昼間、サルバは遠くから砲撃の音が聞こえた。
数マイル離れた場所での戦闘から。砲弾が爆発するたびに、彼は家族のことを思い出し、彼らが無事であることを願い、いつまた家族と一緒にいられるのかと必死に考えました。

四日目に、老婦人は彼に、出発することを告げました。

「池が今は単なる水たまりであることがわかりましたね。冬が近づいています。そして乾季。そして、この戦い。」彼女は騒音の方向にうなずきました。「私は水辺の近くの別の村に行きます。あなたはこれ以上私と一緒にいることができません。」

サルバはパニックに陥りながら彼女を見つめた。なぜ彼女と一緒に行けないのですか？

彼が大声で尋ねる前に、女性は再び話し始めた。 「兵士たちは私を放っておくでしょう、老婆は一人でいます。あなたと一緒に旅をするほうが私にとって危険です。」

彼女は同情して首を横に振った。 「申し訳ありませんが、もうお手伝いできません」と彼女は言いました。 「どこを歩いていても、戦闘からは必ず離れてください。」

サルバはよろめきながら納屋に戻った。何をしようか、どこに行こうか？の彼の頭の中で言葉が何千回も繰り返されました。それはとても奇妙でした。彼はその老婦人と知り合ってまだ数日しか経っていませんでしたが、今では彼女がいなくなったらどうするか想像できませんでした。

彼は納屋の中に座って何も見ずに外を見つめていました。光として暗くなり、夕方の騒音が始まりました—虫の羽音、枯れ葉のカサカサ音、そして別の音...声？

Machine Translated by Google

サルバは音の方に顔を向けた。そう、それは声だった。何人かは家に向かって歩いていましたが、十数人にも満たない小さなグループでした。彼らが近づくと、サルバは大きく息をついた。

薄れていく光の中で、近くにいる人々の顔が見えた。男性のうち2人の額にはV字型の傷跡があった。ディンカのパターンが再び登場しました。これは、男性になるための儀式の一環として、サルバの村の少年たちに与えられたものです。

この人たちもディンカ人でした！その中に彼の家族も含まれているでしょうか？

Machine Translated by Google

第四章

スーダン南部、2008 年

ニャちゃんの母親はニャーちゃんからプラスチックの容器を取り上げ、水を3つの大きな瓶に移した。彼女はニャに、茹でたソルガムの食事の入ったボウルを手渡し、その上に少量の牛乳を注ぎました。

ニャは外の家の日陰に座って食事をしました。

食べ終わると、彼女はボウルを中に戻しました。彼女の母親は、ニャの弟の赤ちゃんを育てています。 「アキールを連れて行って」と母親はニャの妹に向かってうなずきながら言った。

妹をちらっと見ながら、ニャさんは思ったことを口に出さなかった。まだ5歳だったアキールは小さすぎるし、歩くのが遅すぎるのではないかということだった。

「彼女は学ぶ必要がある」と母親は言った。

ニャはうなずいた。彼女はプラスチックの容器を手に取り、Akeerを連れて行きました。手。

食事をするのに十分な時間家に帰ったニャは、今度は二度目の池へ行くことになる。池に行っては戻って、池に行っては戻って、ほぼ丸一日歩きます。これがニャーの一年のうち七ヶ月の日課だった。

毎日。毎日。

スーダン南部、1985年

サルバさんは息を止めて、顔を一人ずつ確認した。それから空気が彼の肺から出て、すべての希望を持って行ったかのようでした。

見知らぬ人たち。彼の家族には誰もいません。

Machine Translated by Google

老婦人が彼の後ろからやって来て、一行に挨拶した。 "どこに行くの？"彼女は尋ねた。

何人かの人々が不安げな視線を交わした。返事はなかった。

女性はサルバの肩に手を置いた。 「こいつは一人だ。ウィル
彼を連れて行きますか？」

サルバは人々の顔に疑問の念が浮かんでいるのを見た。店の前には数人の男性が
グループは互いに話し始めました。

「彼は子供だ。我々の速度を落とすだろう」

「もう一口で餌をあげる？ もう餌を見つけるのは大変だよ」

「彼は本当の仕事をするには若すぎる。私たちの助けにはならないだろう。」

サルバは頭を下げた。他の者たちと同じように、彼らは再び彼を置き去りにすることになるだ
ろう...

すると、グループ内の女性が手を伸ばし、そのうちの1人の腕に触れました。
人々。彼女は何も言わず、まず男を見て、次にサルバを見た。

男はうなずき、グループの方を向いた。 「私たちは彼を連れて行きます」と彼は言いました。

サルバは急いで顔を上げた。グループの何人かは首を振って不平を言っていました。

男は肩をすくめた。 「彼はディンカです」と彼は言い、再び歩き始めた。

おばあさんはサルバさんにピーナッツの入った袋と飲み水用のひょうたんをあげました。彼は
彼女に感謝して別れを告げた。それから彼はそのグループに追いつき、遅れをとらない、文句を
言わない、誰にも負けない、と決心した。

Machine Translated by Google

誰にも迷惑。自分の質問が歓迎されないことを恐れて、彼はどこへ行くのかさえ尋ねなかった。

彼が知っていたのは、彼らがディンカ族であり、戦争から遠ざかろうとしているということだけだった。彼はそれで満足しなければならなかった。

終わりのない散歩の日々となった。サルバの足は、頭の中にある考え、同じ言葉を何度も繰り返しながら時間を刻んでいた。「私の家族はどこですか？」
私の家族はどこですか？

彼は毎日起きてグループと一緒に歩き、正午には休み、
暗くなるまでまた歩きました。彼らは地面で寝ました。地形は低木地から森林地帯に変わりました。彼らは立ち枯れた木々の間を歩きました。
食べるものはほとんどなく、あちこちにいくつかの果物があり、常に未熟か虫が腐っていました。サルバのピーナッツは3日目の終わりまでになくなっていました。

約１週間後、さらに多くの人々、つまり別のグループが参加しました。
ディンカ族とジュルチョル族と呼ばれる部族の数人のメンバー。男も女も、少年も少女も、老いも若きも、歩いて、歩いて……。

どこまでも歩いていく。

サルバはこれほどお腹が空いたことはなかった。彼は、自分が歩いている地面にも、周囲の森にも、空の光にも気づかず、どういうわけか片足をもう一方の足に先んじてよろよろと歩きました。空腹以外は何も現実ではありませんでした。かつては胃が空洞だったのに、今では体のあらゆる部分が深くうずくような痛みを感じています。

いつもならディンカ族の間を歩いていたが、今日は茫然と足を引きずりながら少し遅れていることに気づいた。彼の隣を歩いていたのは、チュルチョル出身の青年だった。サルバは彼の名前がブクサであること以外は彼のことをあまり知りませんでした。

彼らが歩いていくと、ブクサは速度を落とした。サルバは、もう少し頑張ってついていけないのではないかとゆっくり考えた。

Machine Translated by Google

ちょうどそのとき、ブクサは歩みを止めた。サルバも立ち止まった。でも彼もそうだった
弱っていて、なぜ立ち止まっているのか尋ねたいと思っていました。

ブクサは首を傾げ、眉間にしわを寄せて聞いた。彼らはしばらくの間、動かずに立っていました。サルバには残りの人の騒音が聞こえた
前を行くグループ、かすかな声、木のどこかで鳥の鳴き声……。

彼は耳を澄ました。それが何だった？ジェット機？爆弾？銃声は遠ざかるのではなく、近づいていったのだろうか？サルバさんの恐怖は増大し始め、ついには空腹感よりもさらに強くなりました。それから-

「ああ」ブクサの顔にゆっくりとした笑みが広がった。 「ほら。聞こえますか？」

サルバは眉をひそめて首を振った。

「はい、また来ました。来てください！」ブクサはとても早く歩き始めました。サルバはついていくのに苦労した。ブクサは二度立ち止まって聞きましたが、さらに早口で話し続けました。

「何　　」サルバは尋ね始めた。

ブクサはとても大きな木の前で突然立ち止まりました。 "はい！"彼は言った。
「さあ、他の人たちに電話してください！」

もうサルバは興奮を感じ取っていた。 「でもどうしよう
それらを教えてください？"

「あの鳥です。私が鳴き声を聞いていた鳥です。彼が私をここに連れて行ってくれました。」ブクサの笑顔は
さらに大きくなった。 「見えますか？」彼は木の枝を上に指さした。 「蜂の巣。立派で大きな蜂の巣だ」

サルバはグループの他のメンバーに電話をかけるために急いで立ち去った。ジュルチョルはハニーガイドと呼ばれる鳥の鳴き声に従うことができるということを彼は聞いていたのです。しかし、彼はそれが行われるのをこれまで見たことがありませんでした。

ハニー！今夜、彼らは宴会をすることになったのです！

Machine Translated by Google

第 5 章

スーダン南部、2008 年

ニャーの村から歩いて3日のところに大きな湖がありました。毎年、雨が止み、村近くの池が干上がると、ニャさんの家族は自宅から大きな湖の近くのキャンプに移動しました。

ニャさんの家族は戦闘のため、一年中湖のそばに住んでいたわけではない。彼女の部族であるヌエル族は、湖の周囲の土地をめぐってライバルのディンカ族としばしば争った。 2つのグループが衝突したとき、男性と少年が負傷し、さらには死亡した。そのため、ニャと村の残りの人々が湖で生活したのは乾季の 5 か月間だけで、この時期は両部族が生き残りをかけて奮闘するのに忙しかったため、戦闘が起こる頻度ははるかに低かったのです。

故郷の池と同じように、湖も干上がっていました。でもそうだったから池よりもはるかに大きかったが、湖底の粘土にはまだ水が溜まっていた。

湖のキャンプでのニャの仕事は自宅と同じで、水を汲むことだった。彼女は湖底の湿った粘土に手で穴を掘りました。彼女は穴が自分の腕の長さと同じくらいの深さになるまで、掘り続け、一握りの粘土をすくい出しました。彼女が掘るにつれて粘土はどんどん湿っていき、ついには穴の底に水が浸透し始めた。

穴を満たしていた水は不潔で、液体というよりは泥でした。それ浸透が非常に遅いので、ひょうたん一杯分を集めるのにも長い時間がかかりました。ニャは穴のそばでしゃがんで待っていました。

水を待っています。ここでは、一度に何時間も。そして、雨が降って彼女と家族が家に帰れるまで、5か月間毎日毎日でした。

Machine Translated by Google

スーダン南部、1985年

サルバの目は腫れて閉じた。ブクサの前腕はゴツゴツしていて生々しい状態だった。ブクサの友人は唇が厚い人でした。彼らは皆、ひどい殴り合いをしているかのように見えました。

しかし、彼らの怪我は打撲ではなかった。それらは蜂に刺されたものでした。

ミツバチを巣から吸い出して眠らせるために、木の下で火が起こされていました。しかし、ブクサと他のチュルチョル族の男性たちが巣を木から外していたとき、ミツバチたちは目を覚まし、自分たちの家が奪われたことを知り、まったくうれしくありませんでした。彼らは、羽音を立てたり、群がったり、刺したりすることで、自分の不幸を非常に明確に表現しました。すごく刺す。

それだけの価値はあった、とサルバは慎重に目に触れながら思った。彼のお腹は、蜂蜜と蜜蝋がたっぷりと詰まった丸い塊だった。豊かで甘美な黄金の甘さが滴る蜂の巣ほどおいしいものはありませんでした。グループの他のみんなと同様に、彼は持てるだけ食べ、そしてもう少し食べました。

彼の周囲では、人々が大満足そうに指をなめていた　。
舌を刺されたディンカ人男性1人を除いて。腫れがひどくて口を閉じることができなかった。彼はほとんど飲み込むことができなかった。

サルバは彼をとても残念に思いました。かわいそうな男は蜂蜜を楽しむことさえできませんでした。

サルバさんのお腹に何かが入ったので、歩くのが楽になったようです。彼は蜂の巣の最後の一片をなんとか救い出し、それを葉っぱで慎重に包みました。次の日の終わりまでに、蜂蜜はすべてなくなっていましたが、

Machine Translated by Google

サルバは蜜蝋を口に含み、甘さを思い出すために噛んだ。

グループは日を追うごとに少しずつ大きくなっていきました。より多くの人が参加しました
彼らは、一人で、あるいは二、三人の小さな集団で歩いていた人々だった。サルバさんは、毎朝と夕方
にグループ全体を調査し、家族を探すのを習慣にしました。しかし、彼らは決してその中にはいません
でした
新参者。

サルバがグループに加わってから数週間後のある晩、サルバはいつものように暖炉の周りを歩き
回り、懐かしい顔に会えることを期待してあらゆる顔をスキャンした。

それから-

「ああ！」

サルバは足元を失いそうになった。彼の下の地面はまるで地面のようだった。
動く。

少年が飛び起きて彼の前に立った。

「おい !君が踏んだのは私の手だよ！」少年はディンカ語を話しましたが、アクセントが異
なり、サルバの村周辺の出身ではないことを意味していました。

サルバは一歩下がった。 「ごめんなさい。怪我はしましたか？」

少年は何度か手を開いたり閉じたりしてから、肩をすくめた。 "その
よし。でも、どこへ行くのかは本当に気をつけるべきだよ。」

「ごめんなさい」サルバは繰り返した。一瞬の沈黙の後、彼は背を向けて、
再び群衆の中を捜索し始めた。

少年はまだ彼を見ていた。 "あなたの家族？"彼は尋ねた。

サルバは首を振った。

Machine Translated by Google

「私もだよ」少年は言った。彼はため息をつき、サルバはそのため息を心の奥まで聞いた。

彼らの目と目が合った。 「私はサルバです。」

「私はマリアです」

友達ができてよかったです。

マリアルはサルバと同い年だった。彼らはほぼ同じ高さでした。
彼らが並んで歩くとき、彼らの歩幅はまったく同じ長さでした。
そして翌朝、二人は一緒に歩き始めた。

「私たちがどこへ行くか知っていますか？」サルバは尋ねた。

マリアルは頭を上に傾け、朝日から目を守るために額に手を当てた。 「東です」と彼は賢明に言った。
「私たちは朝日の中を歩いています」

サルバは目を丸くした。 「私たちが東に行くのはわかっています」と彼は言った。 「誰でもできるよ
それを言ってください。でも東はどこだ？」

マリアは少し考えた。 「エチオピア」と彼は言った。 「スーダンの東はエチオピアです」

サルバは歩みを止めた。 「エチオピア？あれは別の国だ！それはできない」
そこまでずっと歩いてください」

「私たちは東に向かって歩いています」 マリアルはきっぱりと言いました。 「エチオピアは東にあります。」

他の国には行けない、とサルバは思った。そうすれば家族は私を見つけることはできません...

Machine Translated by Google

マリアルはサルバの肩に腕を回した。彼はサルバが何を考えているか分かっているようで、「そんなことは関係ない。このまま東に歩き続ければ、世界一周してここスーダンに戻ってくることを知らないの？」と答えた。その時、私たちは家族を見つけるでしょう！」

サルバは笑わなければならなかった。二人とも笑いながら、腕を組んで歩幅を完璧に合わせて再び歩き始めました。

サルバが学校から藪の中に逃げ込んでから一か月以上が経過した。一行は今、アトゥオット族の土地を歩いていた。

ディンカ語では、アトゥオット族は「ライオンの民」と呼ばれていました。
彼らの地域にはアンテロープ、ヌー、ヌーの大群が生息していました。
そしてそれを捕食するライオン。ディンカ族はアトゥオット族についての物語を語った。
アトゥオット人は死ぬと、かつて持っていた人間の肉に強い飢えを抱いて、ライオンとして地球に戻ってきました。アトゥオット地方のライオンは世界で最も獰猛だと言われていました。

夜が不安になってきました。サルバは遠くで轟音を聞くことが多く、時にはライオンの爪にかかる動物の断末魔の鳴き声で目が覚めることもありました。

ある朝、彼は眠りが浅くて目がかすみました。彼は自分の体をこすった
目は立ち上がり、再び歩き始めたマリアルの後をよろめきながら追いかけた。

「サルバ？」

話したのはマリヤではなかった。声は彼らの後ろから聞こえた。

サルバは振り返った。彼は驚いて口を開いたが、話すことはできなかった。

Machine Translated by Google

「サルバ！」

第6章

スーダン南部、2008 年

ニャの家族は何世代にもわたって湖のキャンプに来ていました。ニャ自身も生まれた時から毎年そこを訪れていた。このキャンプで彼女が気に入った点の 1 つは、たとえ粘土を掘って水が出るのを待たなければならなかったとしても、毎日 2 回池まで長い距離を往復する必要がなかったことです。しかし今年になって、母親がキャンプを嫌っていたことに初めて気づいた。

彼らには家がなく、仮設の避難所で寝なければなりませんでした。彼らはできるだろうほとんどの持ち物を持って行かなかったので、手近にあるもので何とかしなければなりませんでした。そして、毎日のほとんどの時間を、彼らは水を掘らなければなりませんでした。

しかし最悪だったのは、ニャの父親と兄のデップが狩りに出かけたときの母親の表情だった。

恐れ。

彼女の母親は怖がっていました。家族の男性が逃げるのではないかと心配どこかのディンカ族の部族に衝突して、彼らは戦って怪我をするだろう、あるいはもっとひどいことになるだろう。

彼らはこの何年もずっと幸運でした。ニャさんの家族にはディンカ氏によって傷つけられたり殺されたりした者はいなかった。しかし彼女は、このようにして愛する人を失った村の他の家族を知っていました。

ニャは毎朝、母親の顔に「また幸運になれるだろうか？」という疑問が浮かんでいるのが見えました。

それとも今度は彼らが誰かを失う番だったのか？

Machine Translated by Google

スーダン南部、1985年

サルバはまるで魚のように口を閉じたり、また開いたりした。彼は話そうとしましたが、喉から音が出ませんでした。彼は動こうとしましたが、足が地面に張り付いているようでした。

「サルバ！」男はもう一度言い、急いで彼のほうに走りました。その男がほんの数歩先にいたとき、サルバは突然彼の声を見つけた。

"叔父！"彼は叫び、男の腕の中に駆け込んだ。

ジェウィールおじさんはサルバの父親の弟でした。サルバはそうしなかった叔父は軍隊にいたため、少なくとも2年ぶりに彼に会った。

おじさんは戦争や戦闘について知っているはずです !もしかしたら彼は私の家族がどこにいるのか知っているかもしれません！

しかし、叔父が話すとすぐに、これらの期待は打ち砕かれました。 "あなたは一人ですか？家族はどこにいるの？」と彼は尋ねた。

サルバさんはどこから答え始めればよいのかほとんど分かりませんでした。彼が学校から逃げて藪の中に逃げ込んでから何年も経ったかのように思えた。しかし、彼は叔父にできる限りすべてを話しました。

サルバが話すと、叔父はうなずいたり首を振ったりした。サルバさんが、この間家族のことを一言も見たことも聞いたこともなかったと告げると、彼の顔は非常に厳粛になった。サルバの声は小さくなり、頭を下げた。彼は叔父に再会できて嬉しかったが、あまり役に立たないようにも見えた。

おじさんはしばらく黙っていた。それから彼はサルバの肩をたたいた。 「えっ、甥っ子！」と明るい声で言いました。 「今は一緒にいるから、私が見てあげるよ！」

おじさんは3日前にそのグループに参加していたことがわかったが、30人以上が一緒に旅行していたので、まだ参加していなかった。

Machine Translated by Google

今までお互いを見つけました。二人が歩き始めたとき、サルバさんは叔父さんが銃を持っていることに気づきました。ライフル銃をストラップで肩にかけたものでした。サルバはすでに、軍隊での経験と銃を持っていたことから、叔父がグループから一種のリーダーとみなされていることを感じていた。

「そうだ、私が軍隊を去るとき、彼らは私にライフルを持たせてくれた」と叔父さんは言った。 「だから、何か食べる価値のあるものを見つけたら、すぐにおいしい料理を撮ってあげるよ！」

叔父さんはその言葉を忠実に守りました。まさにその日、彼は若いカモシカを撃ちました。トピと呼ばれるタイプ。サルバさんは皮を剥がされ、解体され、ローストされるのが待ちきれませんでした。スモーキーで肉の香りが空気に満ちる中、彼は口に溢れる唾液を飲み込み続けなければならなかった。

サルバが彼の最初の作品をむさぼり食うのを見て、叔父は笑った。肉。 「サルバ、あなたには歯があるのよ !食べるときに歯を使うのよ！」

サルバは答えることができなかった。彼はおいしい焦げた肉の塊を口に詰め込むのに忙しすぎた。

小さなトピだったけど、グループ全員分のお肉は十分すぎるほどありました。しかし、サルバが急いで食べたことを後悔するのに時間はかからなかった。何週間も飢餓に近い状態が続いた後、彼の胃は激しく反乱し、夜のほとんどを嘔吐して過ごしました。

サルバさんは一人ではなかった。お腹の高鳴りで目が覚めると、彼はキャンプの端に急いで嘔吐し、そこにいる他の人たちも同じことをしているのを見つけました。あるとき、サルバさんは、6人の人々の列の中にいることに気づきました。全員が同じ姿勢で、かがんでお腹を押さえ、次の吐き気の波を待っていました。

彼がこんなに惨めな思いをしなかったら、面白かったかもしれない。

***

Machine Translated by Google

一行はアトゥオットの地を歩き続けた。彼らは毎日、ライオンが小さな木の陰で休んでいるのを目にしました。ある時、遠くでライオンがトピを追いかけているのが見えました。トピ主は逃げましたが、その途中でサルバさんは幸運にも恵まれなかった獲物の骨を見つけました。

サルバとマリアルは、叔父の近くにいて、まだ一緒に歩きました。
時々、叔父さんは他の男たちと一緒に歩き、旅について真剣に話し合った。そのとき、サルバとマリアルは敬意を持って後ずさりしていましたが、サルバは常に叔父の視界を保とうとしていました。そして夜はおじの近くで寝ました。

ある日、グループは夜遅くまでに水場に到着することを期待して、午後遅くに歩き始めました。しかし、何マイルも探しましたが、どこにも水はありませんでした。彼らは夜まで、そして夜通し歩き続けました。彼らは10時間歩き続け、夜明けまでに全員が疲れきっていました。

叔父と他のリーダーたちは最終的にグループがそうしなければならないと決断しました。
休む。
サルバさんは道から二歩外れ、横になる寸前に眠りに落ちた。

叔父の手が肩を揺さぶるのを感じるまで、彼は目を覚まさなかった。灰
目を開けると、すすり泣く声が聞こえた。誰かが泣いていました。サルバは眠気を瞬きして叔父を見た。
その顔はとても厳粛だった。

「ごめんなさい、サルバ」叔父さんは静かに言った。 "あなたの友達..."

マリアル？サルバは辺りを見回した。彼はどこか近くにいるはずです...彼が私の近くで寝たかどうかは覚えていません—私はとても疲れていました—おそらく彼は何か食べるものを探しに行ったのでしょう—

叔父さんはサルバさんの頭を赤ん坊のように撫でた。 「ごめんなさい」とまた言った。

冷たい拳がサルバの心を掴んだようだった。

Machine Translated by Google

第 7 章

スーダン南部、2008 年

ニャは床に座った。彼女は手を伸ばして妹たちの手を取った。

アーキールは気づいていないようだった。彼女はほとんど丸まって横向きに横たわっていた動いていて、時折泣き叫ぶ以外は沈黙している。

彼女の沈黙はニャを怖がらせた。わずか 2 日前、アーキールさんは腹痛について大声で長々と訴えていた。ニャは愚痴ばかり言われてイライラしていました。今、彼女は罪悪感を感じました。妹にはもはや文句を言うだけの力がないことがわかったからです。

ニャは同じ病気で苦しんでいる人をたくさん知っていました。最初はけいれんと腹痛、そして下痢。時には発熱も。病気になった成人や年長児のほとんどは、少なくとも再び働ける程度には回復したが、断続的に何年も苦しみ続ける可能性がある。

高齢者や小さな子供にとって、この病気は危険な可能性があります。彼らの多くは、体に何も保持できず、目の前に食べ物があっても餓死してしまいました。

彼らの村の村長であるニャの叔父は、いくつかの診療所のことを知っていました。歩いて数日。彼はニャさんの家族に、アキールさんを連れて行ってくれれば、医師が彼女の症状を良くする薬を投与してくれるだろうと語った。

しかし、そのような旅はアキールにとって非常に困難なものとなるだろう。彼女が自然に治るようにキャンプに残って休ませるべきでしょうか？それとも、長く険しい歩みを始めるべきでしょうか？そして、時間内に助けが到着することを願っていますか？

スーダン南部、1985年

再び歩きが始まりました。サルバは内外の恐怖に震えた。

Machine Translated by Google

彼は赤ちゃんか少年のように叔父にしがみつき、手にしがみついたり、
できるときはシャツテールを結び、叔父さんを腕の長さ以上に遠ざけることは決してありませんでした。彼は絶えず周囲を見回しました。草の中のあらゆる動きは、ライオンが忍び寄っているように見え、あらゆる静けさは、春を待つライオンのようでした。

マリアルはいなくなり、夜の闇に消えた。彼は決して一人でグループから離れることはなかったでしょう。彼の失踪が意味するものはただ一つ。

ライオン。

ライオンはお腹が空いて、眠っているグループに近づいてきました。数人の男たちが見張りをしていたが、夜の闇の中、長い草の間を風がさざめく中、ライオンは誰にも気づかれずに簡単に近づいたかもしれない。それは小さくて動かない獲物を探していました :眠っているマリアル。

そしてそれは彼を連れ去り、道の近くにいくつかの血の斑点を残しただけでした。

叔父さんがいなかったら、サルバさんは恐怖で気が狂ってしまっていたかもしれない。叔父
彼は午前中ずっと安定した低い声で彼に話しかけました。

「サルバ、私は銃を持っています。近づいてくるライオンを撃ちます。」

「サルバ、今夜は起きて見張っているよ」

「サルバ、私たちはもうすぐライオンの国から出ます。すべてうまくいきます。」

叔父の話を聞き、急いで近くにいようとしたサルバは、全身に寒さの恐怖を感じていたにもかかわらず、なんとか足を動かすことができた。

しかし、何も問題はありませんでした。彼は家族を失い、今度は友人も失った。

Machine Translated by Google

夜に叫び声を聞いた人は誰もいませんでした。サルバさんは、ライオンがマリアルを即死させてくれること、友人が恐怖や苦痛を感じる暇がなかったことを心から願った。

***

風景は緑が増えてきました。空気は水の匂いがした。

「ナイル川だよ」と叔父さんは言った。 「私たちはもうすぐナイル川に来て、渡ります」
向こう側へ」

ナイル川: 世界最長の川、スーダンのすべての生命の母。
叔父さんは、彼らは川の最も広い範囲の一つに来るだろうと説明した。

「それは川には見えません。大きな湖のように見えます。私たちはそうします」
長い時間をかけて向こう側へ渡ってください」

「で、向こう側には何があるの？」サルバはまだ怯えながらささやいた。

「砂漠」とおじさんは答えた。 「そしてその次はエチオピア」

サルバの目には涙があふれた。マリアルのエチオピアについての判断は正しかった。
彼がここにいて、私が間違っていたと彼に伝えることができたらどんなによかっただろう。

サルバはナイル川の岸辺に立っていました。ここで、おじさんが言ったように、川は大きな湖を形成しました。

叔父さんによると、一行はボートでナイル川を渡る予定だという。湖の真ん中にある島々に行くには丸一日かかり、向こう岸に行くにはまた一日かかります。

サルバは顔をしかめた。どこにもボートは見えなかった。

サルバの困惑した表情に、叔父さんは微笑んだ。 「なんだ、持って来なかったのか
「あなたは自分のボートを持っていますか？」と彼は言いました。「それでは、あなたが泳ぎが得意であることを願っています！」

Machine Translated by Google

サルバは頭を下げた。彼は叔父がからかっているのを知っていたが、そう感じた
疲れた　家族のことを心配するのにも疲れたし、哀れなマリアのことを考えるのも疲れたし、
どこへ行くのか分からずに歩くのも疲れた。叔父さんにできることは、ボートについての真実を伝えることくらいでした。

叔父はサルバの肩に腕を回した。　「わかるでしょう。私たちにはやるべきことがたくさんあります。」

サルバはまたもや膨大な量の葦を腕に抱えてよろめきながら前進した。みんな忙しかったです。
何人かの人が水辺で背の高いパピルス草を伐採していました。サルバのように、切り取った茎を集めて造船所に持って行った人もいた。

グループの中には、故郷の村が川や湖の近くにあった人も何人かいた。彼らは葦を結び、巧みに編んで浅いカヌーを作る方法を知っていました。

急ぐ必要があるのかどうかも、戦争がどれほど近づいているのかも知る由もなかった
にもかかわらず、誰もが素早く働きました。戦闘は何マイルも離れた場所で行われる可能性があり、あるいは爆弾を積んだ飛行機が今にも上空を通過する可能性があります。

切る作業と織る作業を行ったり来たりするのは大変な作業でした。しかし、サルバさんは、
この仕事のおかげで気分が少し良くなっていることに気づきました。彼は忙しすぎてあまり心配することができなかった。大きくて扱いにくい、滑りやすい葦の山を運んででも、何かをすることは、
何もしないよりはましでした。

サルバさんは葦を大量に届けるたびに、しばし立ち止まって船大工の技術に感心したものでした。長い葦がきれいに束ねられて並べられていました。束の両端はしっかりと結び付けられます。
次に、葦の束を真ん中で引き離して空洞を作り、両側を全長に沿って結び、基本的な舟を作りました。

Machine Translated by Google

形。葦の層をさらに追加し、結び付けてボートの底を作りました。サルバは葦の山から船首と低い側面の曲線が少しずつ成長していくのを魅了されて見ていた。

グループが十分な数のカヌーを建造するのに丸 2 日かかりました。各カヌーはテストされました。いくつかはうまく浮かず、修正する必要がありました。次に、さらに多くの葦を結び合わせてパドルを形成しました。

ついにすべての準備が整いました。サルバさんは叔父さんと別の男の間でカヌーに乗り込んだ。ナイル川に浮かぶボートの側面を彼はしっかりと握りました。

Machine Translated by Google

第8章

スーダン南部、2008 年

それはまるで音楽のようで、アーキールの笑い声だった。

ニャの父親は、アーキールには医者が必要だと判断した。だからニャと彼女母親はアキーアを特別な場所、つまり病気や怪我をした人々でいっぱいの大きな白いテントに連れて行き、彼らを助ける医師や看護師がいた。
たった2回薬を投与しただけで、アーキールはほぼ元の自分に戻った
ニャはまだ体が弱くて弱っていましたが、簡易ベッドの隣の床に座って一緒に手拍子ゲームをしたので笑うことができました。

白人女性の看護師がニャの母親と話していました。

「彼女の病気は水から来ました」と看護師は説明した。 「彼女は良質できれいな水だけを飲むべきです。水が汚れている場合は、彼女が飲む前に200カウントほど沸騰させるべきです。」

ニャの母親はわかったとうなずいたが、ニャの目には不安があるのが見えた。

湖底の穴からはごく少量の水しか採取できませんでした。母親がそのような少量を沸騰させようとすると、200 を数えるずっと前に鍋は乾いてしまうでしょう。

それで、彼らがすぐに村に戻るのは良いことでした。ニャがプラスチック製の水差しに池から汲んできた水は、飲む前に沸騰させることができました。

しかし、来年のキャンプはどうなるでしょうか？そしてその翌年？

そして家にいても、ニャが池まで暑い長い散歩をするときは、池に着いたらすぐに水を飲まなければなりませんでした。

彼女は、Akeer が同じことをするのを止めることは決してできないだろう。

Machine Translated by Google

スーダン南部、1985年

湖面は穏やかで、ボートが岸から離れた後は、何も見えず、ただ水が増えていくだけでした。

彼らは何時間も漕ぎました。景色も動きも単調だった
サルバは寝ていたかもしれないが、寝てしまうと横に倒れてしまうのではないかと心配した。彼は、叔父のパドルのストロークを数え、20回のストロークごとにカヌーがどれだけ進むかを測定することで、目を覚まし続けました。

やがてボートは川の真ん中にある島に到着しました。これ
ナイル川の漁師たちが住み、働いていた場所です。

サルバさんは、漁業コミュニティで見た光景に驚きました。それは
彼らの数週間の散歩の中で、食べ物が豊富にあった最初の場所。村人たちは魚はもちろん、カバやワニの肉もたくさん食べました。
しかし、さらに印象的だったのは、キャッサバ、サトウキビ、ヤムイモなど、彼らが栽培した作物の数でした。作物に水を供給する川全体があったとき、食物を育てるのは簡単でした。

旅行者は誰も取引できるお金や価値のあるものを持っていなかったので、
食べ物を乞わなければならなかった。例外は叔父でした。漁師たちは頼まれもせずに叔父に食べ物を与えました。サルバには、これが叔父がグループのリーダーであるように見えたからなのか、それとも叔父の銃を恐れていたからなのかはわかりませんでした。

叔父はサルバに食べ物を分け与えた。すぐに吸えるサトウキビの切れ端と、火で焼いた魚と、灰の中で焼いたヤムイモだ。

サトウキビのジュースは、サルバの最も鋭い空腹感を和らげた。彼は残りの食事をゆっくりと食べることができ、一口一口を長く食べることができました。

Machine Translated by Google

サルバは家では一度もお腹が空いたことはなかった。彼の家族はたくさんの牛を飼っていました。彼らはルン•アリク村の中でも裕福な家族の一員でした。彼らは主にソルガムと牛乳から作られたお粥を食べていました。父親は時々自転車で市場に行き、袋に入った豆や米を持ち帰っていました。ルン•アリクの乾燥した半砂漠地帯ではほとんど作物を栽培できなかったため、これらは他の場所で栽培されていた。

彼の父親は特別なご褒美としてマンゴーを買うことがありました。マンゴーの入った袋は、特に自転車に他の商品が積まれているときは、運ぶのが大変でした。そこで彼はマンゴーを自転車の車輪のスポークに押し込みました。サルバさんが駆け寄って挨拶すると、父親がペダルをこぐのに合わせて緑色の皮をしたマンゴーが楽しそうに回転しているのが見えた。

サルバは父親が馬から降りる直前にスポークからマンゴーを取り出したものだった。彼の母親は彼のために皮をむいてくれたが、そのジューシーな中身は彼女のスカーフと同じ色だった。彼女は大きな平らな種から果肉を切り取った。サルバは甘いスライスが大好きでしたが、一番好きなのは種でした。
いつも種子にしっかりとくっついている果物がたくさんありました。彼はそれをかじったりしゃぶったりして、最後の断片まで取り除き、何時間も食べ続けました。

漁師たちの素晴らしい店にはマンゴーはありませんでしたが、サトウキビをかじっていると、サルバさんはあの幸せな時代を思い出しました。
彼は、父親がスポークにマンゴーを入れて自転車に乗っている姿を再び見ることができるだろうかと思った。

太陽が地平線にかかると、漁師たちは突然テントの中に入った。それらは実際にはテントではなく、中で寝転ぶことができるスペースを作るために白い蚊帳が吊るされたり、垂れ下がったりしているだけだった。話したり、食事をしたり、その他のことをするために留まる漁師は一人もいませんでした。まるで全員が同時に消えたかのようでした。

Machine Translated by Google

ほんの数分後、蚊が水中から立ち上がりました。
どこからでも葦。彼らの巨大な暗雲が現れ、甲高い鳴き声が空気を満たしました。何千匹、もしかしたら何百万匹ものお腹を空かせた蚊が密集していたので、気をつけていないとサルバさんは一息で一口食べてしまうかもしれないほどだった。たとえそうだったとしても、それらは彼の目、鼻、耳、体のあらゆる部分など、いたるところにありました。

漁師たちは一晩中網の中にいた。彼らはさえ持っていました
小さなテントから出ずに排尿できるように、網の内側から網のすぐ向こうまで水路を掘りました。

サルバがどれだけ頻繁に蚊をたたいたか、一度のたたきで一度に数十匹を殺したかは関係なかった。彼が一人を殺すごとに、さらに数百人がその代わりに群がってきたように見えた。彼らの甲高い歌声が絶えず耳元で響く中、サルバは一晩中イライラして彼らに向かって平手打ちしたり手を振ったりした。

グループの誰も眠れませんでした。蚊はそれを確信した。

朝になると、サルバは全身刺され傷だらけになった。最もひどいのは背中のちょうど真ん中で、彼が手を伸ばしても傷がつかない場所だった。しかし、手の届くところは血が出るまで掻いた。

旅行者たちはもう一度ボートに乗り込み、島からナイル川の対岸まで漕ぎ出しました。漁師たちは一行に対し、次の航行に備えて水を十分に摂取するよう警告していた。サルバは老婆からもらったひょうたんをまだ持っていた。グループの他のメンバーもひょうたんやペットボトルを持っていました。しかし、容器を持っていない人もいました。彼らは、少なくとも少しの水を持ち歩こうと必死の試みとして、服から細長い布を引き裂き、服を浸しました。

この先には、彼らの旅の最も困難な部分、アコボ砂漠が待っています。

Machine Translated by Google

第9章

スーダン南部、2008 年

訪問者が来た日、ニャの家族は数カ月前から村に戻っていた。実際、キャンプに再び出発する時間が近づいていました。ジープが走ってくると、ほとんどの子供たちが走って出迎えました。見知らぬ人に会うのが恥ずかしがり屋のニャは、遠慮していた。

ジープから二人の男が出てきた。彼らは、ニャの兄であるデップを含む最も大きな少年たちに話しかけ、デップは村長、彼とニャの叔父の家に連れて行った。

酋長が訪問者に挨拶するために家から出てきた。彼らはそこに座っていた他の村の男たちと家の陰で一緒にお茶を飲み、しばらく話し合った。

"彼らは何を話している？"ニャーはデップに尋ねた。

「水に関することです」とデップは答えた。

水？一番近い水はもちろん池で、そこから歩いて半日かかります。

誰でも彼らにそれを言うことができたでしょう。

スーダン南部、1985年

サルバは砂漠のようなものを見たことがありませんでした。彼の村、ルンアリクの周囲には、放牧牛の餌となるのに十分な草や低木が生えていました。木もありました。しかし、ここ砂漠では、小さな常緑樹のアカシアの低木以外に緑のものは何も残っておらず、それがほとんど水なしで長い冬の数ヶ月をなんとか耐えました。

叔父さんは赤坊越えには3日かかると言っていました。サルバの靴熱い石だらけの砂漠の地面には勝ち目はなかった。靴底、作りました

Machine Translated by Google

ゴムタイヤのトレッドはすでに細切れにされ、少量の革と多大な希望でつなぎ合わされていた。ほんの数分後、サルバはばたばたする破片を蹴り飛ばし、裸足で歩き続けなければなりませんでした。

砂漠での最初の日は、サルバがこれまで生きてきた中で最も長い日のように感じたを通して。太陽は容赦なく永遠で、一筋の雲もなければ、そよ風の匂いもなかった。あの乾いた暑さの中を歩くのは、一分間が一時間のように感じられた。呼吸さえも努力になった。サルバが呼吸するたびに、体力は回復するどころか消耗するようだった。

いばらが彼の足を刺した。彼の唇はひび割れて乾いた。叔父は彼に、ひょうたんの中の水をできるだけ長く持たせるように注意した。それはサルバにとって、これまでにやった中で最も難しいことだった。喉の渇きを癒し、命を与える水を大量に飲みたいと体が叫びながら、ほんの少しだけ飲むだけだった。

この日最悪の瞬間は終了間際に起こった。サルバさんは素足を岩に打ちつけ、足の爪全体が剥がれてしまった。

痛みはひどかったです。サルバは唇を噛もうとしたが、終わりのない一日の恐ろしさは彼には耐えられなかった。彼は頭を下げると、涙が流れ始めた。

すぐに彼は息ができなくなるほど激しく泣きました。彼は考えることができなかった。彼にはほとんど目が見えなかった。彼は速度を落とさなければならず、長い旅で初めてグループから遅れをとり始めた。盲目的によろめきながら、彼はグループが自分の前からどんどん遠ざかっていくことに気づかなかった。

まるで魔法にかかったかのように、叔父さんは突然彼のそばに来ました。

「サルバ•マウィエン•ダット•アリク！」彼はサルバのフルネームを使って大声ではっきりと言った。

サルバは頭を上げたが、すすり泣きは驚きで途切れた。

Machine Translated by Google

「あの藪の群れが見えますか？」おじさんは指差して言った。 「あの藪まで歩くだけでいいのよ。できるかな、サルバ•マウィエン•ダット」
アリク？」

サルバは手の甲で目を拭った。彼には藪が見えた。彼らはあまり遠くを見ませんでした。

叔父さんはカバンに手を伸ばした。彼はタマリンドを取り出してサルバに手渡した。

酸っぱくてジューシーな果物を噛むと、サルバは少し気分が良くなりました。

彼らが茂みに着くと、叔父は前方にある岩の塊を指差し、サルバに岩まで歩くように言いました。その後、一本のアカシアが...別の岩の塊が...砂以外は何もない場所。

叔父はこのようにして残りの散歩を続けました。そのたびに、彼はフルネームを使ってサルバに話しかけた。そのたびにサルバさんは家族や村のことを思い出し、傷ついた足をなんとか一歩ずつ、つらい一歩ずつ前に進めることができた。

ついに太陽がしぶしぶ空から押し寄せてきました。の祝福
砂漠に闇が落ち、休息の時が来た。

次の日は前の日の正確なコピーでした。太陽と暑さ、そしてサルバにとって最悪だったのは、まったく変わっていない風景でした。
同じ岩です。同じアカシアです。同じ塵です。グループが砂漠を越えて前進していることを示すものはまったくありませんでした。
サルバさんは、まったく同じ場所に留まりながら何時間も歩いたかのように感じた。

Machine Translated by Google

猛烈な熱がきらめく波を引き起こし、すべてがぐらついて見えました。それともふらふらしてたのは彼だったのか？前方にある大きな岩の塊が、今にも動き出しそうなほどだった……。

動いていました。それはまったく岩ではありませんでした。

それは人々でした。

サルバのグループが近づいてきた。サルバは9人の男を数えた、全員が砂の上に倒れた。

一人は手で小さく必死の動きをした。もう一人がしようとした頭を上げたが、また下がった。どれも音を立てませんでした。

サルバは見ていると、そのうちの5人がまったく動かないことに気づきました。

サルバさんのグループの女性の一人が前に進み出てひざまずいた。彼女は水の入った容器を開けた。

"何してるの？"男が電話した。「あなたには彼らを救うことはできません！」

女性は答えなかった。サルバが顔を上げたとき、涙が見えた彼女の目には。彼女は首を振ってから、布に少量の水を注ぎ、砂の上にいる男性の一人の唇を濡らし始めました。

サルバは横たわる男たちのうつろな目とひび割れた唇を見つめた。熱い砂の上で、彼自身の口が非常に乾いて、飲み込もうとすると窒息しそうになった。

「彼らに水をあげたら、自分の分では足りなくなるよ！」同じ声が叫んだ。「それは無駄　彼らは死ぬだろう、そしてあなたも彼らと一緒に死ぬことになるだろう！」

第10章

スーダン南部、2008 年

Machine Translated by Google

男性たちは会議を終えた。彼らは皆立って、ニャーの家の前を通り過ぎた。ニャも彼らに続く子供たちの群衆に加わりました。

彼女の家を越えて数分歩いたところに木がありました。男たちは木のところで止まり、見知らぬ人たちはニャの叔父ともう少し話し合った。

最初の木から50歩ほどのところに別の木がありました。ニャの叔父が隣にいると、男性の一人が中間点で立ち止まった。
もう一人の男は残りの道を歩き、2本目の木を調べました。

最初の男は、ニャが理解できない言語で友人に呼びかけた。友人は同じ言語で答えましたが、グループに向かって歩きながら、首長に代わって通訳したため、ニャには彼の声が聞こえました。

「ここが、2本の大きな木の中間にある場所です。ここで水が見つかります。」

ニャは首を振った。彼らは何を話していましたか?彼女はその場所を自分の手の甲のように知っていました。この二本の木の間に、村の人々が時々集まり、大きな火の周りで歌ったり話したりしたのです。

雨が降っていない限り、その場所には一滴の水もありませんでした。

スーダン南部、1985年

サルバはひょうたんに手を伸ばした。彼はそれが半分しか入っていないことを知っていましたが、まるで中に水がほとんど残っていないように、突然それがはるかに軽くなったように感じました。

ジュウィールおじさんは彼が何を考えているか察したに違いない。

「いいえ、サルバ」彼はつぶやいた。 「あなたは小さすぎるし、まだ十分な力もありません。水がなければ、残りの散歩を生きていくことはできません。他の何人かは、あなたより上手に対処できるでしょう。」

Machine Translated by Google

案の定、今では3人の女性が地上の男性たちに水を与えていました。

奇跡のように、少量の水で彼らは生き返った。彼らはよろめきながら立ち上がってグループに加わることができ、歩き続けました。

しかし、亡くなった仲間5人は取り残された。掘る道具もなかったし、その上、死者を埋葬するには時間がかかりすぎたであろう。

サルバさんは遺体の横を通り過ぎるとき、見ないようにしていたが、目は遺体の方向に引き寄せられた。彼には何が起こるか分かっていた。ハゲワシは遺体を見つけて、骨だけが残るまで腐った肉を剥ぎ取ります。最初はひどい死に方をし、その後は死体まで荒らされた男たちのことを考えると、彼は気分が悪くなった。

もし彼がもっと年をとっていて、もっと強かったら、彼らに水を与えただろうか？それとも、ほとんどのグループと同じように、彼も水を自分のために保管していたのでしょうか？

それはグループが砂漠に滞在して3日目でした。日没までに彼らは砂漠から出て、その後エチオピアのイタン難民キャンプまで遠くないでしょう。

暑い中をとぼとぼと歩きながら、サルバさんはついに、頭の中に長い影のように広がっていた心配について叔父さんと話す機会を得た。 「叔父さん、もし私がエチオピアにいたら、両親はどうやって私を見つけてくれるでしょうか？」
いつになったらルン•アリクに戻れるの？」

「ここにいる他の人たちと話しました」と叔父さんは言いました。 「私たちは、Loun-Ariik村は攻撃され、おそらく焼かれた。あなたの家族..."
おじさんは立ち止まって目をそらした。もう一度振り返ると、彼の顔は厳かでした。

Machine Translated by Google

「サルヴァ、村への攻撃で生き残った人はほとんどいませんでした。まだ生きている人はいますか？」
藪の中に逃げていただろうし、今どこにいるのか誰も知りません。」

サルバはしばらく沈黙した。それから彼は言いました、「少なくともあなたは私と一緒にそこにいます。エチオピアでは。」

おじさんの声は優しかった。「いいえ、サルバ。私はあなたを
難民キャンプにいますが、その後スーダンに戻って戦争をするつもりです。」

サルバは歩みを止め、叔父の腕を握りしめた。「でも、叔父さん、私には誰もいないのよ！ 私の家族は誰になるの？」

叔父はサルバの手をそっと緩め、少年の手を握らせた。「キャンプには他にもたくさんの人がいるでしょう。その中の何人かと友達になり、そこで一種の家族を作ることになるでしょう。彼らもまた、頼れる人を必要とするでしょう。」

サルバは首を振ったが、叔父のいない収容所での生活がどのようなものになるか想像できなかった。彼は叔父の手をぎゅっと握り締めた。

叔父は黙って立っており、それ以上何も言わなかった。

彼は私にとってそれが難しいことを知っている、とサルバは悟った。彼は私をそこに残したくないが、戻って国民のために戦わなければならない。赤ん坊のように振舞ってはいけない　強くあろうとしなければならない……。

サルバは懸命に飲み込んだ。「叔父さん、スーダンに帰ったら、もしかしたら、
どこかで両親に会います。私がどこにいるかを彼らに教えてください。あるいは、出会った人に話しかけて、ルン•アリクの人々が今どこにいるのか尋ねてもいいでしょう。」

叔父はすぐには答えなかった。すると彼は「もちろんそうするよ、甥っ子」と言いました。

サルバは小さな希望の光を感じた。叔父さんが家族を探しているので、いつか家族全員が再び一緒になる可能性がありました。

Machine Translated by Google

グループの誰も2日間何も食べていませんでした。彼らの水はほとんどなくなっていました。砂漠を離れるというビジョンだけが、彼らを暑さと砂埃の中を突き動かし続けました。

その日の午後早く、彼らは砂漠が後退しつつあることを示す最初の証拠を発見した。それは、泥水の浅い水たまりの近くにある数本の発育不全の木だった。水は飲料には適さなかったが、死んだコウノトリが池の端に横たわっていた。

すぐにグループは鳥を調理して食べる準備を始めました。サルバさんはたき火用の小枝集めを手伝いました。

鳥が焼けるのを見て、サルバは鳥から目を離すことができませんでした。一人あたり一口か二口しかないのに、彼は待ちきれなかった。

すると大きな声が聞こえてきました。グループの他のメンバーと一緒に、彼は向きを変えたそして6人の男が彼らに向かって来るのが見えました。男たちが近づくと、彼らが銃とナタで武装しているのが見えた。

男たちは叫び始めた。

"座って下さい！"

「頭に手を当てて！」

「皆さん !さあ！」

グループの全員が一度に座りました。サルバはそれを恐れていた他の人たちも武器を持っていることがわかりました。

男の一人がグループの中を歩き、叔父の前で立ち止まった。サルバさんは、男の顔に残った儀式の傷跡から、彼がヌエル族の出身であることがわかった。

「反乱軍と一緒ですか？」男は尋ねた。

Machine Translated by Google

「いいえ」叔父は答えた。

「どこから来たの？どこへ行くの？」

「私たちはナイル川の西から来たのよ」と叔父さんは言いました。 "わたしたちは•••にいくつもりです
イタン、難民キャンプへ」

男は叔父に、立ち上がって銃をそこに置いておくように言いました。他の二人の男は叔父を数メートル離れた木に連れて行き、それに縛り付けた。

それから男たちはグループの間を移動した。誰かがバッグを持っている場合、男たちはそれを開け、その中にあったものをすべて持ち出しました。彼らは何人かの人々に衣服を脱ぐよう命令し、それも奪いました。

サルバは震えていた。恐怖の真っただ中でさえ、彼は次のことに気づいた。初めての旅行では、一番若くて小さいのが良かった。男たちは彼の服装に興味を示さなかった。

男たちは略奪を終えると、叔父の銃を拾った。
それから彼らは叔父が縛られている木まで歩きました。

もしかしたら、彼らは私たちを奪ったのだから、放っておいてくれるかもしれない、とサルバは思った。

彼らが笑っているのが聞こえた。

サルバが見守る中、男の一人が叔父に銃を向けた。

3発の銃声が響いた。その後、男たちは逃走した。

第 11 章

スーダン南部、2008 年

二人の男が村を去った後、木々の間の土地をさらに開墾する作業が始まりました。それはとても大変な仕事でした。小さな木や茂みは燃やすか根こそぎにしなければなりませんでした。長い草は鎌で刈らなければならなかった

Machine Translated by Google

そして下にくわを入れた。草むらには毒ヘビやサソリが潜んでいるので、危険な作業でもありました。

ニャーは今でも毎日二回、池へ通っていた。戻ってくるたびに、ゆっくりと、しかし確実に、きれいになった大地が大きくなっていくのが見えました。

地面は乾燥していて、岩のように硬かった。ニャーは当惑し、疑問を感じた。こんな場所に水があるだろうか？

そして、彼女がデップにその質問をすると、彼は首だと言いました。彼女にも彼の目に疑いの色が宿っているのが見えた。

南スーダンとエチオピア、1985年

彼らは叔父を深さ約2フィートの穴に埋めましたが、その穴はすでに何らかの動物によって作られていました。彼への敬意から、グループはその日はそれ以上歩くことはなかったが、時間をかけてリーダーだった男性を追悼した。

サルバはあまりにも無感覚だったので考えることができず、何か考えが浮かんだとしても、愚かに思えた。彼は結局、彼らが食べることができないことに腹を立てた。男たちがグループを略奪している間、さらに多くの鳥がやって来て、骨だけになるまでローストしたコウノトリをつついた。

悲しみに暮れる時間は短く、暗くなってからすぐに歩き始めた。サルバさんは心臓のしびれにもかかわらず、以前よりも速く、より大胆に歩いている自分に驚いた。

マリアルがいなくなった。叔父もサルバの目の前でヌエル人たちに殺され、去っていった。マリアルと叔父はもう彼の側にはおらず、二度とそばにいることはないだろうが、サルバは二人とも彼が生き残って旅を終えてイタン難民キャンプに安全に到着することを望んでいることを知っていた。まるで彼らは、彼の旅を助けるために、自分たちの力を彼に託したかのようでした。

Machine Translated by Google

彼は自分の気持ちについてそれ以外に説明が思いつきませんでした。しかし
疑いの余地はありませんでした。ひどい悲しみの下で、彼はより強くなったと感じました。

サルバさんが叔父さんの世話や保護を受けなくなったため、サルバさんに対するグループの態度は変わりました。もう一度、彼らは、彼が若すぎて小さすぎる、彼が砂漠でしたように、彼らの速度を緩めるか、また泣き始めるかもしれないと不平を言いました。

食べ物も友人も、誰も彼と何も共有しませんでした。叔父
彼はいつも自分が撮影した動物や鳥をグループの全員と共有していました。しかし、サルバは今、スクラップを懇願しなければならず、それがしぶしぶ与えられたことを皆忘れていたようだった。

彼らの彼への接し方を見て、サルバさんはさらに強くなったと感じた。私を助けてくれる人はもう誰もいません。彼らは私が弱くて役に立たないと思っています。

サルバは誇らしげに頭を上げた。彼らは間違っています、そして私がそれを証明します。

サルバさんは、これほど多くの人が同時に同じ場所にいるのを見たことがありませんでした。どうして世界にはこれほど多くの人がいるでしょうか？

数百以上。数千以上。何千も何千も。

人々が列を成し、固まり、固まっています。人々は歩き回ったり、立ったり、座ったり、地面にしゃがんだり、足を伸ばすのに十分なスペースがないために足を丸めて横たわったりしています。

イタンの難民キャンプは、男性、女性、少女、小さな子供など、あらゆる年齢層の人々でいっぱいでした。しかし、難民のほとんどは、戦争が始まったときに村から逃げてきた少年や若者でした。
彼らが逃げたのは、戦争そのものと両側の軍隊という二重の危険にさらされていたからだ。若い男性、そして時には少年さえもそうでした。

Machine Translated by Google

彼らはしばしば戦闘への参加を強制され、それが彼らの家族や地域社会（サルバの学校の教師を含む）が、戦闘の兆候を見つけると少年たちを藪の中に走らせた理由だった。

家族なしで難民キャンプに到着した子どもたちは一緒に集められたため、サルバさんは一緒に旅行していた人々からすぐに引き離された。たとえ彼らが彼に親切ではなかったとしても、少なくとも彼は彼らのことを知っていました。今、再び見知らぬ人々の前で、彼は不安を感じ、おそらく恐怖さえ感じました。

他の数人の少年たちと一緒にキャンプ内を歩きながら、サルバさんはすれ違うすべての顔をちらっと見た。叔父さんは、家族がどこにいるのか誰も正確には知らないと言ってました…では、少なくともここキャンプにいる可能性はなかったのでしょうか？

サルバは見渡す限り広がる大勢の人々を見回した。彼は少し心が沈むのを感じたが、手をこぶしに握り締めて約束した。

彼らがここにいるなら、私が見つけます。

***

何週間も歩き続けた後、サルバさんは同じ場所に留まっていることが奇妙だと感じました。その長く恐ろしい旅の間、安全に立ち寄ってしばらく滞在できる場所を見つけることが非常に重要でした。しかし、キャンプに着いた今、彼は落ち着かず、まるで再び歩き始めなければならないかのように感じました。

収容所は戦争から無事でした。銃やナタを持った男もいなかったし、上空に爆弾を積んだ飛行機もなかった。サルバさんは初日の夕方、茹でたトウモロコシを一杯与えられ、翌朝にはもう一杯与えられた。ここではすでに状況は旅中よりも良くなっていました。

2日目の午後、サルバは人混みの中をゆっくりと進んだ。やがて、彼は門の近くに立っていることに気づきました

Machine Translated by Google

そこがキャンプへの正面玄関で、新しく到着した人々が入ってくるのを眺めていた。
収容所がこれ以上収容できるとは思えなかったが、それでも収容所は来続けた。人々の長蛇の列、ある者は衰弱し、ある者は負傷したり病気になったりして、全員疲れきっていた。

サルバが顔をスキャンしていると、オレンジ色の閃光が彼の目に留まりました。

オレンジ…オレンジのスカーフ…

彼は人々を押してつまずきながら通り過ぎ始めました。誰かが彼に怒って話しかけたが、彼は立ち止まって弁解しなかった。彼にはまだ鮮やかなオレンジ色の斑点が見えていた　そう、それはスカーフだった　女性は彼に背中を向けていたが、彼女は彼の母親と同じように背が高かった　彼は追いつかなければならなかった、邪魔な人が多すぎた

サルバの口から半分すすり泣きがこぼれた。彼は彼女を見失ってはいけません!

第 12 章

南スーダン、2009 年

鉄のキリン。

非常に大きな音を立てる赤いキリン。

キリンは、村に持ち込まれた背の高いドリルでした。
先ほど訪れた男性二人。彼らはさらに10人の乗組員と2台のトラックを連れて戻ってきた。1台はキリンドリルとその他の謎の装備を積んでおり、もう1台はプラスチックパイプを積んでいた。
その間、土地はまだ開墾されていました。

ニャちゃんの母親は赤ん坊を背中に縛り、数人で歩いた
他の女性たちは村と池の間の場所に行きました。彼らは岩や石の山を集め、それらを丈夫な布で束ねて束ねました。彼らは頭の上で束のバランスをとり、掘削現場に戻り、岩を地面に捨てました。

Machine Translated by Google

他の村人たちは、訪問者から借りた道具を使って、
岩を砕いて砂利にします。大量の砂利が必要になります。ニャには理由が分かりませんでした。砂利の山は日に日に大きくなっていきました。

ニャーが池から戻るたびに、機械とハンマーの音が鳴り響き、男性の叫び声や女性の歌声と混じり合った聞き慣れない騒音が聞こえた。人々が力を合わせて頑張っている音だった。

しかし、それはまったく水の音ではありませんでした。

イタン難民キャンプ、エチオピア、1985年

「お母さん !お母さん、お願いします！」

サルバは再び声を上げるために口を開いた。しかし、言葉は出なかった。
代わりに、彼は口を閉じ、頭を下げ、背を向けました。

オレンジ色のスカーフをかぶった女性は彼の母親ではありませんでした。彼はこれを知っていました
確かに、たとえ彼女がまだ遠くにいて、彼は彼女の顔を見ていなかったとしても。

叔父の言葉がよみがえった。「ルン•アリク村が攻撃され…焼かれた。生き残った人はほとんどいなかった…今どこにいるのか誰も知らない。」

もう一度女性に声をかける直前に、サルバさんは叔父さんの本当の意味を悟った　サルバさんは長い間心の中で知っていたこと、それは叔父さんの家族がいなくなったことだった。彼らは銃弾や爆弾、飢餓や病気によって殺されましたが、その方法は関係ありませんでした。重要なのは、サルバが今は独り立ちしているということだった。

彼はまるで巨大な穴、つまり虚無の黒い絶望で満たされた穴の端に立っているように感じた。

私は今一人です。

Machine Translated by Google

家族に残っているのは私だけです。

サルバを学校に通わせていた父親は…マンゴーなどのおやつを持ってきてくれた…群れの世話をしてくれると彼を信頼していた…母親は、いつでも食べ物とミルクを用意し、サルバの頭を撫でる柔らかい手を用意していた。彼が一緒に笑い、一緒に遊び、世話をしていた兄弟や姉妹たち……
彼は彼らに二度と会うことはないだろう。

彼らなしでどうやってやっていくことができますか？

でも、どうして続けられないのでしょうか？彼らは私が生き残って、成長することを望んでいるでしょう
そして私の人生に何かを加えてください…彼らの思い出に敬意を表します。

砂漠での最初のひどい日、叔父さんは何と言ったのでしょうか?
「あの藪の群れが見えますか？あの藪まで歩いていけばいいのです…」

叔父は彼がそうやって砂漠を一歩ずつ乗り越えられるように手助けしてくれた。おそらく...おそらくサルバも同じようにキャンプでの生活を乗り越えることができるでしょう。

今日の残りを乗り切るだけでいい、と彼は自分に言い聞かせた。

この日だけでなく、他の日でもありません。

もし誰かがサルバさんにキャンプで6年間暮らすだろうと告げていたら、
彼は決して信じなかっただろう。

6年後: 1991年7月

「彼らはキャンプを閉鎖するつもりだ。全員が退去しなければならないだろう。」

「それは無理です。どこに行きますか？」

「それが彼らが言っていることだ。このキャンプだけではない。全員がそうだ」

Machine Translated by Google

噂がキャンプ中に飛び交った。誰もが不安でした。として
日が経つにつれて、不安は恐怖に変わりました。

サルバはもうすぐ17歳になる、若者だった。彼はキャンプの援助活動家たちと話をして、その噂についてできる限りのことを学ぼうとした。彼らは彼に、エチオピア政府は崩壊に近いと語った。難民キャンプは外国の援助団体によって運営されていたが、運営を許可したのは政府だった。もし政府が崩壊したら、新しい統治者は収容所に対して何をするでしょうか?

その質問に答えたとき、誰も準備ができていませんでした。ある雨の朝、サルバが学
校のテントに向かって歩いていると、トラックの長い列が到着していました。武装した兵士がトラックから大量に飛び出し、全員に退去を命じた。

命令は単に収容所を去るだけではなく、エチオピアを離れることだった。

すぐに混乱が生じました。それはあたかも人々が人であることをやめ、代わりにパニックに陥り、足を踏み鳴らしている二本足の生き物の巨大な群れになったかのようでした。

サルバはその急増に巻き込まれた。彼の足はかろうじて地面に触れた
彼は走って叫びながら何千人もの人々の群衆に押し流された。土砂降りの雨が騒ぎに拍
車をかけた。

兵士たちは空に向かって銃を発砲し、人々を追い払った
キャンプから。しかし、彼らがキャンプの周囲の地域を越えると、兵士たちは叫び、銃撃しながら彼らを前進させ続けました。

先を急ぎながら、サルバさんは雑談を聞いた。

"川。"

「彼らは私たちを川に向かって追いかけています！」

Machine Translated by Google

サルバは、それがどの川を意味するのかを知っていました。それは、川沿いにあったジロ川です。エチオピアとスーダンの国境。

彼らは私たちをスーダンに追い返している、とサルバさんは思った。彼らは私たちに川を渡らせるでしょう...

梅雨の季節でした。雨で増水したジロの流れは容赦ないものとなるだろう。

ジロは別のことでも知られていました。

ワニ。

第13章

南スーダン、2009 年

ニャーはこれは面白いと思いました。水を見つけるには水がなければなりません。ドリルをスムーズに動かし続けるためには、水がボーリング孔に絶えず流れ続ける必要がありました。

乗組員は1日に数回、車で池まで行ったり来たりした。池
トラックの荷台全体を埋めるのに十分な大きさの巨大なビニール袋のようなものに、パイプで水が注入されました。

バッグから漏れが発生しました。漏れを修正する必要がありました。

パッチから漏れが発生しました。乗組員がパッチを当てました。

その後、バッグからまた漏れが発生しました。掘削は続行できませんでした。

掘削作業員は漏れを見て落胆した。彼らは仕事をやめたかったのです。しかし、上司が彼らを続けさせてくれました。労働者は全員同じ青いつなぎ服を着ていました。それでも、ニャには誰がボスであるかが分かりました。彼は最初に村に来た二人の男のうちの一人でした。もう一人の男は彼の主なアシスタントのようだった。

Machine Translated by Google

上司は従業員を励まし、一緒に笑い、冗談を言いました。それがうまくいかない場合は、真剣に話し、説得しようとしました。そしてそれがうまくいかなかったら、彼は怒るでしょう。

彼はあまり怒らなかった。彼は働き続けました、そして他の人たちも働き続けました。

彼らは再びバッグにパッチを当てました。掘削は続いた。

エチオピア – スーダン – ケニア、1991 〜 1992 年

数百人が川岸に並んだ。兵士らは彼らの何人かを水中に押し込み、ライフルの尻で突いたり、空に向けて発砲したりした。

兵士と銃を恐れて、自ら水に飛び込む人もいた。彼らはすぐに強い流れによって下流に押し流されました。

サルバが岸辺にしゃがんで見ていると、近くにいた若者が水に飛び込みました。流れに乗って彼は急速に下流へ流されたが、川を渡って少しずつ進んでいた。

そのときサルバは、ワニが尻尾を振り下ろす音を目撃した。
若者の近くの水。しばらくして、男の頭が一度、二度、奇妙に震えた。彼の口は開いていた。おそらく彼は叫んでいたのでしょうが、群衆の喧騒と雨でサルバにはその声が聞こえませんでした...次の瞬間、その男は下に引きずり込まれました。

赤い雲が水を染めた。

Machine Translated by Google

雨はまだ降り続いており、銃弾も降り注いでいた。兵士たちは川に向かって発砲し、渡ろうとしている人々に銃を向けた。

なぜ ?なぜ彼らは私たちに向かって発砲するのでしょうか？

サルバには選択の余地がなかった。彼は水に飛び込み、泳ぎ始めました。あ
隣にいた男の子が彼の首を掴んでしっかりとしがみつきました。
サルバは一時間以上かかる暇もなく水面下に追い込まれた。
速く浅い呼吸。

サルバは蹴ったりひっかいたりして苦戦した。彼は私に強くしがみつきすぎています...
できない...空気...空気が残っていない...

突然、少年の握力が緩み、サルバは体を上に向かって飛び上がった。
彼は頭を後ろに投げ出し、大きく空気を吸い込んだ。しばらくの間、彼は息を呑んで息を詰まらせることしかできなかった。

視界が晴れたとき、少年はなぜ手を放したのかが分かった。少年は頭を下げて浮かんでおり、首の後ろの銃弾の穴から血が流れていた。

唖然としたサルバさんは、水の中に押し込まれたことでおそらく命は救われたのだと悟った。しかし、これに驚いている暇はありませんでした。さらに多くのワニが岸から飛び立っていました。
雨、激しい流れ、銃弾、ワニ、腕と足のうねり、叫び声、血…彼はなんとか乗り越えなければなりませんでした。

サルバさんは自分がどれくらい水の中にいたのか分かりませんでした。

何時間も感じた。

何年も経ったように感じました。

Machine Translated by Google

ついにつま先が泥に触れたとき、彼は最後にもう一度手足を泳ぐ動きをさせた。彼は川岸に這って倒れた。それから彼は泥の中に横たわり、息が詰まり、すすり泣きました。

後で彼は、少なくとも千人が命を狙おうとして亡くなったことを知ることになる。
その日は川を渡って、溺れたり、撃たれたり、ワニに襲われたりした。

彼が千人のうちの一人ではなかったのはなぜですか？なぜ彼は幸運な人の一人だったのでしょうか?

再び歩きが始まりました。歩いていますが、どこへ行くのですか？

確かなことは誰も知りませんでした。サルバはどこへ行くべきだったのでしょうか？

家じゃない。スーダンでは今もどこでも戦争が続いています。

エチオピアには戻れない。兵士たちは私たちを撃つだろう。

ケニア。ケニアには難民キャンプがあるらしい。

サルバは決心した。彼は南に歩いてケニアに向かった。そこに着いたら何が見つかるか彼には分かりませんでしたが、それが彼にとって最善の選択だったようです。

他の少年たちの群衆も彼の後を追った。誰もそれについて話さなかったが、
初日の終わりに、サルバは約1500人の少年たちのグループのリーダーになった。中には5歳くらいの
若い子もいました。

それらの最も小さな少年たちは、サルバに弟のクオルを思い出させた。しかしその後、彼は驚くべき考えを思いつきました。クオルはもうその年齢ではありません。彼はもうティーンエイジャーです。サルバさんは、兄弟姉妹のことを、今の姿ではなく、最後に見たときの姿でしか考えることができないことに気づきました。

Machine Translated by Google

彼らは今も戦争が続くスーダンの一部を旅していた。戦闘と爆撃は日中に最もひどいものであったため、サルバさんは、グループは太陽が輝いているときに隠れて、夜にウォーキングをするべきだと判断した。

しかし暗闇の中では、彼らが正しい方向に進んでいるのかどうかを確信するのは困難でした。時には、少年たちは何日も旅をして、自分たちが大きな円を描いていたことに気づくこともあった。こんなことが何度も起こったので、サルバさんは数え忘れた。彼らは南に向かって歩いている他の少年たちのグループに出会った。どのグループにも、銃弾や爆弾で怪我をしたり死亡したり、野生動物に襲われたり、弱すぎたり病気でついていけないために置き去りにされたりした少年たちなど、恐ろしい危険の話がありました。

サルバはその話を聞いたとき、マリアルのことを思い出した。彼は自分のことを感じた叔父の死後数日と同じように、決意は強まっていた。

ケニアまで無事に連れて行ってやろう、と彼は思った。どんなに大変でも。

彼はグループを組織し、全員に食べ物をあさるという仕事を与えました。薪を集めます。グループが眠っている間、見張りに立ってください。彼らが見つけた食べ物や水はすべて、全員に平等に分け与えられました。小さな男の子たちが疲れて歩けなくなると、年長の男の子たちが交代で子供たちをおんぶしました。

少年たちの中には、自分の役割を果たしたくない時もありました。サルバは彼らに話しかけ、励まし、なだめ、説得した。時には厳しい言葉を発したり、怒鳴ったりすることもあった。しかし、彼はこれをあまり頻繁に行わないように努めました。

まるでサルバさんの家族が、そこにいないにもかかわらず、彼を助けてくれているかのようだった。彼は自分が弟のクオルをどのように世話したかを思い出した。しかし、彼はまた、年上のアリクやリングを聴かなければならないことがどのような感じかを知っていました。そして彼は姉妹たちの優しさを思い出すことができた。父親の強さ。彼の母親の世話。

何よりも、叔父が砂漠で彼を励ましてくれたことを思い出した。

Machine Translated by Google

一度に一歩ずつ…一度に一日ずつ。今日だけ、この日だけを乗り越えて…

サルバさんは毎日こう自分に言い聞かせた。彼はグループの男の子たちにもそう言いました。

そしてある日、グループはケニアへ向かいました。

1,200人以上の少年たちが無事到着した。

彼らは1年半かかりました。

第14章

南スーダン、2009 年

3日間、ニャさんの家の周囲はドリルの音で満たされていました。 3日目の午後、ニャは訓練場の周りに集まった他の子供たちに加わった。大人たちも石を叩きながらの仕事から立ち上がって、こちらへ漂流してきた。

作業員たちは興奮しているようだった。彼らは自分たちのように素早く動いていました
リーダーが号令をかけた。それから-

シュー！

水しぶきが空高く舞い上がりました！

これは作業員が井戸に配管していた水ではなかった。これは新しい水、穴から出てきた水でした。

誰もが水を見て歓声を上げました。訓練を操作していた二人の作業員を見て皆は笑った。彼らはびしょ濡れで、服は完全に染み込んでいた。

Machine Translated by Google

群衆の中の女性がお祝いの歌を歌い始めました。ニャは他の子供たちと一緒に手をたたきました。しかし、ニャは井戸から噴き出す水を見ながら顔をしかめた。

水は澄んでいませんでした。茶色で重厚感がありました。

泥だらけでした。

Ifo 難民キャンプ、ケニア、1992 〜 1996 年

サルバは現在22歳になっていた。過去 5 年間、彼はケニア北部の難民キャンプで暮らしていました。最初はカクマ キャンプ、次に IFO でした。

カクマは、乾燥した風の強い砂漠の真ん中に孤立した恐ろしい場所でした。有刺鉄線の高いフェンスがキャンプを囲んでいた。永久に離れる場合を除き、離れることは許されませんでした。ほとんど刑務所のような気分でした。

カクマには7万人が住んでいた。 8万、9万以上だという人もいた。一緒に逃げ出すことができた家族もいたが、やはりエチオピアと同様、難民のほとんどは孤児の少年や若者だった。

その地域に住んでいた地元の人々は難民を受け入れることを好まなかった近くのキャンプ。彼らは頻繁に忍び込んで難民から盗みました。
時には争いが勃発し、人々が傷ついたり殺されたりすることもあった。

カクマでの2年間の悲惨な生活の後、サルバはキャンプを離れることを決意した。
彼ははるか南と西に別の難民キャンプがあることを聞いており、そこでは状況が良くなることを望んでいた。

もう一度、サルバと他の数人の若者は何か月も歩きました。しかし
イフォの野営地に到着すると、事態はカクマのときと何ら変わらないことがわかった。みん
ないつもお腹がすいていて、

Machine Translated by Google

決して十分な食べ物ではありません。キャンプに到着するまでの長く恐ろしい旅の途中で、多くの人が病気になったり怪我をしたりしました。少数の医療ボランティアでは、助けを必要とする人全員にケアを提供することはできませんでした。サルバさんは、少なくとも自分の健康状態が幸運だったと感じた。

彼は必死に働き、追加の食料を買うために使える少しのお金を稼ぎたかったのです。彼は、いつか収容所を出て何とか教育を続けられるように、お金を貯めたいとさえ夢見ていました。

しかし、仕事はありませんでした。待つ以外に何もすることがありませんでした。次の食事は、キャンプの外の世界のニュースを聞くためです。日は長くて空っぽだった。それは数週間、数か月、そして数年に及んだ。

希望を養うものがほとんどなかったとき、希望を持ち続けるのは困難でした。

マイケルはアイルランドという国から来た援助活動家でした。サルバさんは多くの援助活動家に出会った。彼らは行ったり来たりし、キャンプに数週間、長くても数か月滞在しました。援助従事者はさまざまな国から来ていましたが、通常は互いに英語で話しました。難民の中には英語を話せる人がほとんどいなかったため、援助従事者とのコミュニケーションが困難になることがよくありました。

しかし、何年もキャンプにいた後、サルバは少し理解することができた英語。彼は時々それを話そうとさえしました、そしてマイケルはほとんど常にサルバが言おうとしていることを理解しているようでした。

ある日の朝の食事の後、マイケルはサルバに話しかけました。 「あなたは英語を学ぶことに興味があるようですね」と彼は言いました。 「どうやって読み方を学びたいですか？」

レッスンはその日から始まりました。マイケルは小さな紙切れに3つの手紙を書きました。

「A、B、C」と彼は言い、スクラップをサルバに手渡した。

Machine Translated by Google

「A、B、C」サルバは繰り返した。

その日は残りずっと、サルバは「A、B、C」とほとんど独り言のように、しかし時々大きな声で、静かな声で言いながら歩き回った。彼は紙を100回眺め、棒で土に文字を描く練習を何度も繰り返した。

サルバさんは幼い頃にアラビア語を習ったことを思い出した。
の
アラビア語のアルファベットには 28 文字がありました。イギリス人はわずか26人。英語では文字が互いに離れているので、区別するのは簡単でした。アラビア語では文字は常に結合されており、文字の前後に何があるかによって文字の見え方が異なる場合があります。

サルバが字を書くことを学んだ日、マイケルはこう言った。
彼自身の名前。 「とても熱心に勉強するので、習得が早いです。」

サルバさんは自分が何を考えているかは語らなかった。マイケルがキャンプを離れる前に英語を読めるようになりたくて一生懸命勉強していた、ということだった。
サルバさんには、他の援助活動家が時間をかけて彼に教えてくれるかどうかは分かりませんでした。

「でも、たまには仕事を休むのはいいことだよ。気分転換に、ちょっと違うことをしてみようよ。君はこれが得意だと思うよ。君は背が高いからね。」

そこでサルバさんはマイケルから 2 つのこと、それは読み方とバレーボールの遊び方を学びました。

キャンプ中にある噂が広まっていた。それはささやきのように始まりましたが、すぐにサルバの耳の中で轟音のように感じました。彼は他に何も考えることができなかった。

アメリカ。

Machine Translated by Google

米国。

噂では、約3,000人の少年と若者が、
難民キャンプはアメリカに住むために選ばれるだろう！

サルバさんは信じられませんでした。どうしてそれが真実なのでしょうか？彼らはどうやって手に入れるのでしょうか
そこには？彼らはどこに住んでいるのでしょうか？さすがに無理でしたね……。

しかし日が経つにつれ、援助関係者らはそのニュースを認めた。

誰でも話せるのはそれだけだった。

「彼らは健康な人だけを望んでいます。もしあなたが病気なら、あなたは選ばれません。」

「もしあなたが反乱軍の兵士だったことがあれば、彼らはあなたを連れて行かないでしょう。」

「選ばれるのは孤児だけ。家族が残っているなら、ここに残らなければなりません。」

数週間が経過し、その後数か月が経過しました。ある日、キャンプの管理テントに張り紙が貼られた。それは名前のリストでした。あなたの名前がリストに載っていれば、それは次のステップである面接に進んだことを意味します。
面接後はアメリカに行くかもしれません。サルバの名前はリストになかった。

次のリストにもその次のリストにも載っていませんでした。

選ばれた少年たちの多くはサルバよりも若かった。おそらくアメリカはあまり年をとりすぎている人を望んでいないのだろう、と彼は思った。

リストが投稿されるたびに、サルバさんは名前を読んで心臓が高鳴った。彼は希望を失わないよう努めた。同時に、あまり期待しすぎないように努めた。

時々彼は、期待することと期待しないことによって自分が真っ二つに引き裂かれるように感じた。

Machine Translated by Google

ある風の強い午後、マイケルはサルバのテントに駆け寄った。

「サルバ !早く来い !今日はあなたの名前がリストに載ってるよ ！」

サルバさんは友人が話し終える前に飛び起きて走り始めた。管理テントに近づくと、彼は速度を落とし、息を整えようとした。

彼は間違っているかもしれない。サルバという名前の別の人物かもしれません。すぐには見ません...遠くから見ると、私の名前に似ている名前が見えるかもしれません。確認する必要があります。

サルバは群衆の間を肩でかき分け、リストの先頭に立った。彼はゆっくりと頭を上げて、その本を読み始めた。
名前。

そこにありました。

サルバ•ダット—ニューヨーク州ロチェスター。

サルバはニューヨークへ行く予定だった。

彼はアメリカに行くつもりだったんだ！

Machine Translated by Google

第15章

南スーダン、2009 年

井戸から噴き出す水は茶色で濁っていましたが、小さな男の子の中には、すぐに水を飲みたがる子もいました。しかし、母親が彼らを引き止めました。男性たちは訓練を続けた。彼らのリーダーはニャの叔父や父親、そして他の村の人々と話し合いました。
男性。

その後、デップは彼女に事情を説明した。 "心配しないで！"彼は言った。 「水が濁っているのは、池で使っていた古い水がまだ混ざっているからです。地下の良質できれいな水に十分深く到達するために、さらに掘削しなければなりません。そして、水を注入しなければなりません」パイプを引き、砂利で基礎を作り、ポンプを設置してその周りにセメントを流し込みます。そしてセメントは乾燥する必要があります。」

デップ氏によると、彼らが水を飲めるまでにはあと数日かかるだろうという。

ニャはため息をつき、大きなプラスチックの缶を拾い上げた。池までまた歩きます。

ケニア、ナイロビ – ニューヨーク州ロチェスター、1996 年

ロストボーイズ。

アメリカでは彼らはそう呼ばれていた　戦争で家や家族を失い、難民キャンプにたどり着くまでに一度に数週間、あるいは何か月も迷子になってさまよい続けた少年たちだ。

援助関係者はサルバさんと、一緒に旅行する他の8人の少年たちにこのことを説明した。その女性は主に英語を話しました。時々彼女はアラビア語で一言か二言言いましたが、その言語はうまく話せませんでした。彼女

Machine Translated by Google

ゆっくり話そうと努めましたが、伝えたいことがたくさんあったので、サルバさんは何か重要なことを誤解しているのではないかと心配していました。

彼らはトラックに乗ってIFO難民キャンプから加工センターまで移動した
ケニアの首都ナイロビにて。無限のフォームに記入する必要がありました。
彼らの写真が撮られました。健康診断がありました。サルバにとっては、興奮しすぎて眠れず、疲れすぎて何が起こっているのかすべてを把握できなかったため、すべてがぼんやりとしていた。

しかし、一つだけ明らかな瞬間があった。それは、彼に新しい服を与えたときだった。キャンプでは、彼は古いパンツとさらに古いTシャツを着ていました。できる限り丁寧に扱っていたが、シャツには穴が開き、ショーツのウエストバンドは伸びてボロボロになっていた。

キャンプの職員らは寄付が入るたびに衣類を配ったが、必要とする人たちに十分な衣類が提供されることはなかった。

今、サルバの腕には新しい服が山積みになっていた。下着、靴下、スニーカー。長ズボン。 Tシャツとその上に着る長袖シャツ。そして、彼はこれらすべての服を同時に着る必要がありました。

「アメリカは冬だ」と援助関係者は言った。

"冬？"サルバは繰り返した。

「はい。とても寒いです。ニューヨークではもっと服が与えられます。」

もっと服を?サルバは首を振った。どうしたらこれ以上服を着られるでしょうか？

サルバさんはナイロビで飛行機に乗ったとき、目を疑った。
全員に席があり、荷物も持っていました。これだけの人員、何百もの重いパッド入りの椅子、そしてたくさんの荷物を積んで、飛行機は一体どうやって離陸するのでしょうか?

Machine Translated by Google

鳥が素早く羽ばたいて軽やかに飛び立つようなものではなく、エンジンから金切り声と轟音を響かせながら飛行機が長い滑走路をよろよろと下っていく様子は、あたかも飛行機が飛行機に乗り込むために全力を尽くしなければならないかのようだった。空気。

飛行機が無事に飛び立つと、サルバさんは外の景色を見つめた。
小さな窓。世界はとても大きかったのに、そこにあるものはすべてとても小さかったのです。
広大な森林と砂漠は単なる緑と茶色の斑点となった。車が蟻のように列をなして道路を這っていた。そして、そこには何千人もの人々がいたが、彼には一人も見えなかった。

"お飲み物はいかがですか？"

サルバはきちんとした制服を着た女性を見上げて首を振った
彼が理解していないことを示すために。彼女は微笑んだ。 「コカコーラ？オレンジジュース？」

コカコーラ !昔、サルバの父親が、
市場への旅行から帰ってきたコカ•コーラ。サルバの最初の味は驚くべきものでした。口の中で泡が飛び跳ねていたのです。なんと珍しいご馳走だったろう。

「コカ•コーラ、ありがとう」とサルバさんは言った。そして一口飲むごとに彼は思い出した
彼の家族はボトルを手から手へ渡し、くすぐったい泡を見て笑い、分かち合い、一緒に笑いました。

サルバさんの新しい家への旅には、1 機、2 機ではなく、3 機の飛行機が必要でした。最初の飛行機はナイロビからドイツという国のフランクフルトまで飛びました。それは驚くべきドスンという音を立てて着地し、その後急ブレーキがかかったのでサルバさんは座席の上で前方に投げ出された。お腹にかかるストラップが彼を強く捕らえた。彼はフランクフルトからニューヨーク市まで2台目の飛行機に乗りました。それも突然着地したが、今度はサルバは準備ができており、肘掛けにしっかりとつかまった。

Machine Translated by Google

ニューヨーク市では、援助職員が少年たちを別の門まで案内した。いくつかの旅の最終行程を一人で進む人もいれば、2人か3人のグループで行動する人もいた。ロチェスターへ向かうのはサルバただ一人だった。援助関係者は、新しい家族がそこで待っているだろうと語った。

ロチェスター行きの飛行機では、乗客のほとんどは旅行中の男性でした自分自身で。でも女性も何人かいて、家族連れも何人かいて母親と父親と子供たち。人々のほとんどは白人でした。フランクフルトの空港から始まって、サルバはここ数時間で、これまでの人生で見たよりも多くの白人を目にした。

彼は見つめないように努めたが、家族を注意深く観察せずにはいられなかった。考えが彼の頭の中でループし続けました。

新しい家族がそこにいなかったらどうしますか？彼らの気が変わったらどうなるでしょうか？彼らが私に会って私を好きじゃなかったらどうしますか？

サルバは深呼吸をした。一歩ずつ、彼は自分に言い聞かせた。ただ今のところ、このフライトは乗り切れるはずです...

飛行機はついに着陸し、車輪をきしませた。一方、サルバさんは肘掛けを握り、これから起こることに備えた。

空港のロビーで笑顔で手を振っているのは、彼の新しい家族でした。父親のクリス。母親のルイーズ。そして4人の子供たち。サルバには以前と同じように兄弟がいるだろう。彼らの元気いっぱいの笑顔を見て、少し肩が楽になった気がした。

サルバさんは疲れていたので、「こんにちは」と「ありがとう」を何度も言いました。混乱の中で、これが彼が確信を持った唯一の言葉だった。彼は誰が何を言っているのか理解できませんでした。特にルイーズはあまりに早口だったので、最初は彼女が英語を話しているのかどうかさえわかりませんでした。

Machine Translated by Google

そしてそうです、彼らは彼のためにもっと多くの服を持っていました! - 大きなふわふわのジャケット、帽子、スカーフ、手袋。彼はジャケットを着てジッパーを閉めた。袖がだぶだぶで、腕をうまく動かすことができないように感じました。彼は、体と腕がとても太り、脚がとても細い今、自分がとても愚かに見えるのではないかと思いました。しかし、家族の誰も彼を笑わなかったので、彼はすぐに、家族全員が同じ種類のジャケットを着ていることに気づきました。

空港ターミナルのガラス扉がスライドして開いた。極寒の空気が襲ってきたサルバの顔は平手打ちのようだった。彼はこれまでにこれほど寒く感じたことはありませんでした。彼が生涯住んでいたアフリカの地域では、気温が70度を下回ることはめったにありませんでした。

息を吸い込んだら、きっと肺が凍って機能しなくなるだろうと彼は思った。しかし、彼の周りでは人々がまだ歩き、話し、動き回っていました。どうやら、これほど寒い気温でも生き延びることは可能だったらしく、使いにくいパッド入りのジャケットの必要性を理解したようだ。

サルバさんはターミナルのドアの中でしばらく立ち止まった。空港を出ることは、スーダン、村、家族など、これまでの生活を永遠に離れるような気分でした。

おそらく開いたドアから吹き込む冷たい空気のせいか、彼の目には涙が浮かんだ。彼の新しい家族はすでに外にいました。彼らは振り返って彼を振り返りました。

サルバさんは涙を瞬きして消し、アメリカでの新たな生活への第一歩を踏み出した。

第十六章

南スーダン、2009 年

最初の水しぶきを見て興奮した後、村人たちは仕事に戻りました。ニャーの家の前に数人の男が集まった。彼らは、くわ、鋤、鎌などの道具を持っていました。

Machine Translated by Google

彼女の父親は彼らに会いに出かけました。男たちは一緒にあるところへ歩いて行った
2番目の大きな木の向こう側に位置し、土地を開墾し始めました。

ニャはしばらく彼らを眺めていました。彼女の父親は彼女を見て、
手を振った。彼女はプラスチックの缶を置き、彼のところへ駆け寄りました。

「パパ、何をしているの？」

「ここの土地を開墾しています。建設の準備をしています。」

「何を建てるの？」

ニャの父親は微笑んだ。「推測できないの？」

ニューヨーク州ロチェスター、1996 ～ 2003 年

サルバはロチェスターに来て 1 か月近く経ちましたが、まだ未舗装の道路を 1 つも見たことがありませんでした。南スーダンとは異なり、ここアメリカではどの道も舗装されているように見えました。時々、車が猛スピードで通り過ぎるので、誰でも歩いて安全に渡れることに彼は驚いた。彼の新しい父親、
クリスは、田舎には未舗装の道路が存在するが、サルバの新しい近所には何もないと言った。

すべての建物に電気が通っていました。どこにでも白人がいました。
雪が一度に数時間にわたって空から降り注ぎ、その後何日も地面に留まりました。日中は溶け始めることもありましたが、すべて消える前にさらに雪が降ることもありました。サルバさんの新しい母親、ルイーズさんは、雪が完全に消えるのはおそらく4月、あと3か月になるだろうと彼に告げた。

サルバさんの新しい生活の最初の数週間は非常に戸惑いました。
彼の勉強に感謝していました。彼のレッスン、特に英語は、彼に集中するものを与え、一度に 1 ～
2 時間混乱を遮断する方法を提供しました。

Machine Translated by Google

彼の新しい家族も助けてくれました。彼らは皆彼に親切で、彼が学ばなければならない何百万ものことを辛抱強く説明してくれました。

サルバさんはIFO難民キャンプからニューヨークの新居まで移動するのに4日かかった。彼は、自分がまだ同じ地球にいることが信じられないときもありました。

***

サルバはいくつかの簡単な単語以上のものを学んでいましたが、英語が非常に混乱していることに気づきました。 「ああ」という文字のように。荒々しい...しかし...戦いました...大枝を通して...同じ文字が非常に多くの異なる方法で発音されました。または、文に応じて単語をどのように変更する必要があるか。歩き、鳴き、卵を産む生きた鳥のことを「ニワトリ」と言いましたが、それは「s」が付いていない「ニワトリ」でした。

それが食べられる準備ができて皿に置かれたとき、「夕食にチキンを食べます。」たとえ百羽の鶏を調理したとしても、それは正しかった。

時々、彼はいつか話したり読んだりできるようになるのだろうかと思った英語も上手。しかし、何ヶ月も何年もかけて何時間も努力した結果、彼の英語はゆっくりと上達しました。マイケルのことを思い出し、サルバもバレーボールチームに入部した。キャンプのときと同じようにバレーボールをするのは楽しかったです。ボールのセットとスパイクはどの言語でも同じでした。

サルバさんはロチェスターに6年以上住んでいた。彼は大学に進学し、ビジネスを学ぶことに決めていました。彼は、いつかスーダンに戻って、そこに住む人々を助けたいと漠然と考えていました。

それは不可能な概念のように思えることもありました。彼の故郷では、あまりにも多くの戦争と破壊、貧困、病気、そして飢餓がありました。
政府や富裕層によって解決されなかった問題が非常に多い

Machine Translated by Google

人々、あるいは大きな援助団体。彼は助けるために何ができるでしょうか？サルバはこの質問についてよく考えましたが、答えは見つかりませんでした。

長い一日の勉強が終わったある晩、サルバさんは家族のコンピュータの前に座って電子メールを開いた。彼は、いとことほとんど知らない人からのメッセージを見て驚きました。いとこはジンバブエの救援機関で働いていた。

サルバさんはメッセージをクリックして開きました。彼の目はその言葉を読みましたが、最初は脳はそれらを理解できませんでした。

「…国連クリニック…あなたのお父さん…胃の手術…」

サルバはその言葉を何度も繰り返し読みました。それから彼は飛び起きて、家の中を走ってクリスとルイーズを見つけました。

"私の父！"彼は叫びました。 「彼らは私の父を見つけました！」

何度か電子メールを交換した後、サルバさんは、いとこが実際に父親に会ったことも、父親と話したこともないことを知りました。彼の父親が療養していた診療所はスーダン南部の僻地にありました。電話や郵便サービスはなく、クリニックのスタッフと連絡を取る方法もありませんでした。
スタッフは治療したすべての患者のリストを保管していました。これらのリストは国連の援助機関に提出されました。サルバさんのいとこは代理店の一つで働いており、リストにサルバさんの父親の名前が載っているのを見たことがあった。

サルバさんはすぐにスーダンへの旅行を計画し始めた。しかし戦争によりまだ荒れ狂っていたので、調整するのは非常に困難でした。彼は、空港や道路のない地域で許可を取得し、何十もの書類に記入し、飛行機の飛行や自動車の輸送を手配しなければなりませんでした。

サルバ、そしてクリスとルイーズも、さまざまな代理店やオフィスと電話で何時間も費やしました。すべての計画が整うまでには、数日や数週間ではなく、数か月かかりました。そして病院に連絡を取る手段もなかった。時々、サルバさんは遅れやイライラに半狂乱になりそうになった。

Machine Translated by Google

もし父が行き先を誰にも告げずに退院したらどうなるでしょうか?到着が遅すぎる場合はどうすればよいですか?もう二度と彼を見つけることはできないだろう……。

ついに、すべてのフォームに記入し、すべての書類手続きが整いました。サルバさんはジェット機でニューヨーク市へ、もう一機でアムステルダムへ、そして三機目でウガンダのカンパラへ飛んだ。カンパラでは、スーダン南部のジュバに向かう小型飛行機に乗るまで、税関と入国審査を通過するのに2日かかった。それから彼はジープに乗って、埃っぽい未舗装の道路を藪の中へ進みました。

すべてが見慣れたものでありながら、なんと異なっていたことでしょう。未舗装の道路、雑木林や木々、棒を束ねて屋根を葺いた小屋、すべてがサルバの記憶どおりで、まるで昨日出発したばかりのようだ。同時に、スーダンでの彼の人生の記憶は非常に遠いものになりました。どうして思い出が同時にこんなにも近くに感じられ、同時にとても遠くに感じられるのでしょうか？

何時間もジープに乗って道路に沿って揺れたり、ぶつかったりした後、一週間近くの疲れ果てた旅の後、サルバさんは仮設病院の回復室として機能する掘っ立て小屋に入った。白人女性が立って彼を出迎えた。

「こんにちは」と彼は言いました。 「マウィエン•ダット•アリクという名前の患者を探しています。」

第 17 章

南スーダン、2009 年

「私たちがここで何を作っていると思いますか？」ニャの父親は微笑みながら尋ねた。

「家？ ニャーは推測した。「それとも納屋？」

Machine Translated by Google

彼女の父親は首を横に振った。 「もっと良いものがあるよ」と彼は言った。 "学校。"

ニャーは目を丸くした。最寄りの学校は家から歩いて半日かかりました。デップはそこに行きたがっていたので、ニャはそのことを知っていました。しかし、それは遠すぎた。

"学校？"彼女はこだました。

「はい」と彼は答えた。 「ここに井戸があれば、誰も井戸に行かなくて済むだろう」
もはや池。これで子供たちは全員学校に通えるようになります。」

ニャは父親を見つめた。彼女の口は開いたが、言葉は出てこなかった。
ようやく彼女が話せるようになったとき、それはたささやき声だけだった。 「子供たち全員、パパ？
女の子たちも？」

父親の笑顔はさらに広がった。 「そうだ、ニャ。女の子たちもね」と彼は言った。 "今、
私たちのために水を汲みに行ってください。」そして彼は長い草を刈る仕事に戻りました。

ニャーは戻ってプラスチックの缶を拾い上げた。彼女はまるで飛んでいるように感じた。

学校 !彼女は読み書きを学ぶでしょう！

スーダンおよびニューヨーク州ロチェスター、2003 〜 2007 年

サルバは混雑した診療所のベッドの一つの足元に立っていた。

「こんにちは」と彼は言った。

「こんにちは」と患者さんは丁寧に答えてくれました。

「あなたを訪ねてきました」サルバは言った。

「私を訪ねるためですか？」男は顔をしかめた。 「でも、あなたは誰ですか？」

「あなたはマウィエン•ダット•アリクさんですよね？」

Machine Translated by Google

「はい、それが私の名前です。」

サルバは内心震えながら微笑んだ。父親は今では老けて見えましたが、サルバはすぐに父親だと分かりました。しかし、まるで彼の目は耳の助けを必要としているかのようでした。彼が本物であると信じるためには、父親の言葉を聞く必要がありました。

「私はあなたの息子です。私はサルバです。」

男はサルバを見て首を振った。 「いいえ」と彼は言った。 "そうではない
可能"

「はい」とサルバは言った。 「私です、父さん」彼はベッドの横に移動した。

マウィエン•ダットは手を伸ばして、この背の高い見知らぬ人の腕に触れた
彼のそばに。 「サルバ？」彼はささやいた。 「本当にあなたでいいのですか？」

サルバは待っていた。マウィエン•ダットはしばらく見つめた。それから彼は泣きました
「サルバ !息子、息子！」

喜びのすすり泣きで体が震えながら、彼は手を伸ばしてサルバをしっかりと抱きしめた。

彼らが最後に会ってからほぼ19年が経っていた。

マウィエン•ダットさんは息子の頭に水を振りかけました。これは、行方不明になった人が再び
見つかった人を祝福するディンカの方法です。

「誰もがあなたが死んだと確信していました」とマウィエン•ダットは言った。 "村
あなたのために牛を殺したかったのです。」

それが、サルバの人々が愛する人の死を悼んだ方法でした。

「そんなことは許さない」と父親は言った。 「あなたがまだどこかで生きているという希望を捨てた
ことはありません」

Machine Translated by Google

「そして……そして私の母は？」サルバはかろうじて期待を込めて尋ねた。

彼の父親は微笑んだ。 「彼女は村に戻ってきました」

サルバは笑いたいと同時に泣きたかった。 「彼女に会わなければなりません！」

しかし、父親は首を横に振った。 「ルン•アリクの近くではまだ戦争が続いています、私の息子。もしあなたがそこに行けば、双方ともあなたに戦闘を強制しようとするでしょう。

行ってはいけませんよ。」

もっと話したいことがたくさんありました。彼の父親はサルバに次のように語った。姉妹たちは彼の母親と一緒にいました。しかし、彼の3人の兄弟のうち、戦争を生き延びたのはリングだけでした。最年長のアリクさんと最年少のクオルさんはともに死亡した。

小さなクオル... サルバはしばらく目を閉じて、想像しようとしました もやもやした時間と悲しみの中で、兄弟たちを救ったのです。

彼は父親の病気についてさらに学びました。長年にわたり汚染水を飲み続けた結果、マウィエン•ダットの消化器系全体がホロホロ虫だらけになっていた。彼は病気で衰弱しており、この診療所に来るまで約300マイルを歩き、最終的に到着した時にはかろうじて生きていました。

サルバと父親は数日間一緒に過ごした。しかし、いつの間にか、サルバはアメリカに戻る時が来ました。彼の父親も間もなくクリニックを去ることになる。彼が受けた手術は成功し、すぐに長い距離を歩いて家まで帰れるほど体力が回復するだろう。

サルバさんは「安全になり次第、村に行きます」と約束した。

「私たちはそこであなたを待っています」と彼の父親は順番に約束しました。

Machine Translated by Google

サルバさんは父親の顔に顔をしっかりと押し付け、別れの抱擁を交わし、涙が流れて混ざり合った。

米国に戻る飛行機の中で、サルバさんは父親との訪問時のあらゆる瞬間を心の中で繰り返した。父親が祝福の水をかけてくれたとき、彼は再び額に冷たさを感じた。

そして、あるアイデアが彼に思いつきました。自分に何ができるかというアイデアです。スーダンの人々を助けてください。

彼はそれができるだろうか？とても手間がかかるでしょう！おそらくそれもそうだろう難しい。しかし、試してみなければどうやって分かるでしょうか？

ロチェスターに戻ったサルバは、自分のアイデアに取り組み始めました。解決すべき問題は何百万もあるように見えました。彼にはたくさんの助けが必要でした。クリスとルイーズは彼に多くの提案をしました。彼らの友人であるスコットは、サルバが念頭に置いていたようなプロジェクトを立ち上げる専門家でした。彼とサルバは何時間も何日も一緒に働きました...それは数週間から数ヶ月にまで成長しました。

その過程で、サルバさんは助けたいと願う他の人々に会いました。彼は彼ら全員に感謝した。しかし、たとえ彼らの助けがあったとしても、それは彼が想像していたよりもはるかに大変な作業でした。

サルバさんはプロジェクトのために資金を集めなければなりませんでした。そして、これを行うには唯一の方法がありました。彼は人々に話し、お金をくれるように頼まなければなりませんでした。

サルバさんが初めて聴衆の前で話したのは学校のカフェテリアだった。約100人が彼の話を聞きに来ていました。部屋の前にはマイクがありました。マイクに向かって歩くサルバの膝は震えていた。彼は自分の英語がまだあまり上手ではないことを知っていました。彼が発音を間違えたらどうしますか？もし聴衆が彼のことを理解できなかったらどうなるでしょうか？

Machine Translated by Google

しかし、彼はそれをしなければならなかった。彼がそのプロジェクトについて話さなかったら、誰も話さなかったでしょう
それについて学びましょう。誰もお金を寄付してくれないし、それをうまく機能させることもできないでしょう。

サルバはマイクに向かって話した。 「へー、こんにちは」と彼は言った。

その瞬間、サウンドシステムに問題が発生しました。彼の後ろのスピーカーが恐ろしい金切り声を上げた。サルバは飛び上がってマイクを落としそうになった。

手が震えながら、彼は観客を眺めた。人々は微笑んだりくすくす笑ったりしていた。何人かの子供たちは耳を押さえていました。彼らは皆とてもフレンドリーに見え、子供たちを見て彼は思い出しました。彼が大勢の前で話をしたのはこれが初めてではなかったのです。

何年も前、少年たちを率いてエチオピアの難民キャンプからケニアの難民キャンプまで歩いていたとき、彼は毎朝と夕方に集会を招集していた。少年たちは彼に向かって並び、彼は彼らに自分たちの計画について話し合った。

彼を見ているすべての目…しかしどの顔も彼の言うことに興味を持っていました。ここでも同じでした。聴衆は彼の話を聞きたくて学校の食堂に来ていました。そう思うと少し気分が良くなり、再びマイクに向かって話しかけた。

「こんにちは」と彼が繰り返すと、今度は自分の声だけがスピーカーから聞こえてきました。彼は安堵の笑みを浮かべて続けた。 「私はスーダン南部のプロジェクトについてお話しするためにここに来ました。」

1年が経過し、2年が経ち、そして3年が経ちました。サルバさんは教会、市民団体、学校などで何百人もの人々と話をしました。彼は自分のアイデアを現実にすることができるでしょうか？サルバさんは希望を失っていることに気づくたびに、深呼吸して叔父の言葉を思い出した。

Machine Translated by Google

一度に一歩ずつ。

一度に 1 つの問題を解決してください。この 1 つの問題だけを考えてください。

毎日、一度に 1 つ問題を解決しながら、サルバは目標に向かって進みました。

Machine Translated by Google

第十八章

南スーダン、2009 年

ニャは列に並んで順番を待ちました。彼女はペットボトルを持っていました。

ついに井戸が完成しました。砂利を敷いて作ったものです
基礎を作り、ポンプを設置し、セメントを流し込んで乾燥させました。

ポンプが初めて使用される前に、村人たちは全員集まってきました。労働者のリーダーは青いキャンバスでできた大きな看板を持ち出した。キャンバスには書き込みがありました。書かれていたのは英語でしたが、リーダーはニャーの叔父に話しかけ、叔父は看板に書かれている内容をみんなに話しました。

「『エルム•ストリート•スクールに敬意を表して』」と叔父は言った。 「これはアメリカにある学校の名前です。その学校の生徒たちがこの井戸を掘るために資金を集めました。」

おじさんは看板の一端をかざした。労働者のリーダーはもう一方の端を支えた。他の全員がその周りに立っていて、労働者の一人が
彼らの写真。この写真はアメリカンスクールに送られ、そこの生徒たちが井戸と現在それを使用している人々を見ることができるようになりました。

それから村人たちは皆、水が来るのを待つために列に並びました。
新しい井戸。

ニャが列の先頭に着くと、叔父に恥ずかしそうに微笑んだ。叔父は仕事の手を止めて彼女に微笑み返した。それから彼はポンプのハンドルを動かし始めました。上にも下にも、上にも下にも…

ポンプの口から水流が流れ出ました。

Machine Translated by Google

ニャはポンプの口の下にボトルを抱えていました。ボトルはすぐにいっぱいになりました。

彼女は次の人にボトルに水を入れてもらうために脇へ退いた。それから彼女は飲みました。

水が美味しかったです。池の水のように暖かくも濁っていませんでした。涼しくて透明でした。

ニャは飲むのをやめてボトルを持ち上げて、それを見ました。
まったく色のないものがこんなに美しく見えるのは面白いことです。

彼女はさらに数口飲んでから、周りを見回した。

誰もがボトルかカップを持っていました。彼らはその美味しい水を飲んだり、もっと飲むために列に並んで待ったり、話したり笑ったりしていました。それはお祝いでした。

ニャから遠くないところに立っている年老いたおじいさんが首を横に振った。大声で
「ここは、私たちがたき火のお祝いによく集まった場所です。私は生まれてからずっと
この地面に座っていました。そして、何年もの間、自分がこの良い水の上に座っているとは知りませんでした！」と彼は言いました。
彼の周りの誰もが笑った。ニャーも笑った。

あと数日で学校は終わります。ニャとデップとアキールは他の子供たちと一緒に学校に通っていました。来年には、村民が野菜や鶏肉、その他の商品を売り買いできる市場ができる予定だ。
いつか診療所を設立するという話もありました。そうすれば、Akeer さんが病気になったときのように、助けを求めるために遠くまで歩いて行かなくても済みます。

村にこれらすべての良いものをもたらしたのは井戸でした。

しかし、井戸は彼らだけが使うためのものではありませんでした。人々はきれいな水を汲むために、何キロも離れたところからやって来ました。ニャは大人たちの話を聞いて、船長が井戸に関して多くの取り決めをしていたことを知っていた。誰も水を拒否されたことはありませんでした。村人の中には井戸の維持を担当する人もいます。彼らはそうでしょう

Machine Translated by Google

人々はこの新しい仕事で忙しいので、村全体が作物や牛の世話を手伝うことになりました。ニャの叔父を含む他の村人たちは、争いが起こったら解決してくれるだろう。

井戸は彼らの生活をさまざまな面で変えることになる。

もう二度と池まで水を汲みに行く必要はないだろう、とニャは思った。

彼女は、冷たい新鮮な飲み物を飲みながら、少し歩き回りました。すると彼女は乗組員のリーダーの姿を目にした。彼は一人で立っていて、トラックの一つにもたれかかり、叔父がポンプを動かすのを眺めていた。

デップは彼女がその男を見ているのを見ました。

「あの男、労働者のボスだ」とデップは言った。 「彼がディンカ族だということを知っていますか？」

ニャは驚いてデプを見た。

ディンカ族とヌエル族は外見的にはそれほど違いはありませんでした。部族を区別するには、人々の顔の傷跡のパターンを観察する必要がありました。ディンカ族の傷跡のパターンはヌエル族のものとは異なっていました。

しかし、乗組員のリーダーの顔には傷はありませんでした。ニャーはいくつか聞いたことがある十代の少年たちはそのことについて話していました。明らかに大人であるのに、なぜ彼に傷がなかったのか不思議に思っていました。リーダーの補佐はヌエルでした。乗組員のほとんども同様で、全員にヌエル人の傷跡があった。ニャはそれについて深く考えていませんでしたが、リーダーもヌエルだとずっと思い込んでいたことに今になって気づきました。

ディンカ族とヌエル族は何百年もの間敵対していた
年。

「なぜディンカ人は私たちに水を持ってくるのでしょうか？」彼女は声に出して疑問に思いました。

「叔父と父が彼のことを話しているのを聞いた」とデップは言った。

Machine Translated by Google

「彼は自分の民のために多くの井戸を掘削してきました。今年はヌエル族のためにも掘削することに決めました。」

デップはニャの質問にあまり答えていませんでした。おそらく彼は答えを知らないだろう、と彼女は思った。しかし今、ニャは何かしなければならないことがあるように感じました。

彼女はその男が立っているところへ歩いて行きました。彼は気付かなかった
最初は彼女だったので、彼女は静かに待っていました。

それから彼は彼女を見た。「こんにちは」と彼は言いました。

恥じらいがニャーに溢れ出た。一瞬、彼女は話すことができるとは思わなかった。彼女は地面を見下ろし、次にポンプの口から今も流れ出る水の流れを眺めた。

そして彼女は自分の声を見つけた。「ありがとう」と彼女は言い、勇敢に彼を見上げた。「水を持ってきてくれてありがとう。」

男は微笑んだ。"あなたの名前は何ですか？"彼は尋ねた。

「私はニャです。」

「お会いできて嬉しいです、ニャ」と彼は言いました。「私の名前はサルバです。」

サルバ•ダットからのメッセージ

この本は私の人生の実話に基づいています。この本によって、より多くの人がロストボーイズとスーダンという国について知ってくれることを願っています。

私はスーダン南部のトンジ県にあるロウン•アリクという小さな村で生まれました。そして、本の中で書かれているように、私はアメリカに来る前に何年もエチオピアとケニアの難民キャンプに滞在していました。

Machine Translated by Google

たくさんの方々に感謝しています。国連と
飢餓の危機に瀕したとき、国際赤十字社が私の命を支えてくれました。ムーア家、
セントポール聖公会教会、ニューヨーク州ロチェスターのコミュニティは、私の
米国訪問を歓迎してくれました。また、特にモンロー コミュニティ カレッジで受けた教育
にも感謝しています。

そして、私のプロジェクト「Water for Sudan, Inc.」に協力してくれた人々、つまり
全国の学校、教会、市民団体、個人に深く感謝します。スーダン水道委員会、そして私と緊密
に協力してくれたロータリークラブに特に感謝します。スーダンの故郷の人々を助けるとい
う夢が実現し始めています

真実。

私は希望と忍耐力を持っていたので、過去のすべての困難な状況を克服できました。
この2つがなかったら私は成功しなかったでしょう。若い人たちに言いたいのは、物事が困
難なときやうまくいかないときは、落ち着いてください。諦めるのではなく、粘り強く続け
れば必ず乗り越えられます。禁煙は、忍耐や希望よりもはるかに人生の幸福を減
少させます。

サルバ•ダット

ニューヨーク州ロチェスター

2010年

著者のメモ

この物語の詳細の一部はフィクション化されていますが、描かれている主要な出来事は
サルバ自身の経験に基づいています。私は彼の文書を読み、何時間もインタビューしまし
た。私はまた、ロスト•ボーイズによる他の本やロスト•ボーイズに関する記述も読みました。ニ
ャの話については、彼女のような村で井戸が掘削されているのを見た旅行者にインタビュー
することができました。彼らのビデオ映像や写真を調べることも有益でした。

Machine Translated by Google

第二次スーダン内戦として知られる、描かれている紛争
この本の中での活動は 1983 年に始まりました。戦争期間中、多くの派閥が関与し、指導者の交代が何度も起こりましたが、本質的に対立する側は北部のイスラム教徒が多数を占める政府と南部の非イスラム教徒連合でした。 。

何百万人もの人々が殺され、投獄され、拷問され、誘拐され、または奴隷化されました。さらに数百万人が永久避難となり、故郷に戻ることができなくなりました。避難民の中には、安全な避難場所を求めてスーダン南部、エチオピア、ケニアを絶望的な気持ちで歩き回ったサルバのようないわゆるロストボーイ数十万人もいた。

戦後、故郷に戻ることができたロスト•ボーイズの多くは、家族が失踪していることに気づきました。また、サルバさんが住んでいたのと同じように、難民キャンプで苦しんでいた人もいます。最終的には、何十年も離れていた愛する人たちと再会する人もいました。

戦争開始からほぼ20年が経過した2002年、米国政府はスーダン和平法を可決し、200万人以上を殺害した大量虐殺でスーダン政府を正式に非難した。

3年後、南北の間で和平協定が締結された。
南部には6年間の自治権、つまり自らを統治する能力が与えられた。住民投票が予定されており、その期間中にスーダン南部の国民は北部から離脱して独立国家となるかどうかを投票することになる。
独立国家。

スーダン西部のダルフール戦争は別の紛争であり、和平協定の対象にはなっていない。この記事を書いている時点で、その戦争は依然として、自分たちをアラビア人であると認識する勢力と、自分たちをアフリカ人であると認識している勢力の間で戦われている。二度の戦争と数年にわたる深刻な干ばつは、スーダンの人々に計り知れない苦しみをもたらしました。

スーダンは面積的にはアフリカ最大の国であり、アフリカ諸国では10番目に大きい国です。
世界。

Machine Translated by Google

***

サルバさんは、この物語の出来事以来、スーダンでさらに二度、家族に会った。その中には、ジェウィールおじさんの子供たちであるいとこたちとの感動的な再会も含まれている。そして驚くべきことに、エチオピアからケニアまでサルバと一緒に歩いたロスト•ボーイズのうち7人が、ニューヨーク州ロチェスター地区に移住した際にサルバと再会した。

2010 年 6 月の時点で、Salva Dut の非営利団体である Water for Sudan は、スーダン南部でディンカ族とヌエル族のために数十の井戸を掘削していたコミュニティ。まさに最初の井戸は、サルバの故郷であるロウン•アリク村で掘削されました。サルバさんは現在、年の半分を米国で組織のための資金集めに費やし、残りの半分をスーダンで井戸の掘削に費やしている。この組織の取り組みについて詳しくは、www.waterforsudan.org をご覧ください。

私が初めてサルバに会ったのは数年前、夫と私がスーダンの水について知ったときでした。 2008年、私の夫は井戸を直接見るためにスーダンを旅行しました。私の果てしない質問に答えてくれた彼の助けに感謝しています。この物語は彼なしでは書くことができなかったでしょう。

私と家族は、サルバを友人として数えることができてとても幸運だと感じています。それは持っています彼についてこの本を書くことができて本当に光栄でした。

謝辞

心から感謝します:

クリスとルイーズ•ムーアとその子供たち、

サルバのアメリカ人家族。

ジョン•ターナー、ナンシー•フランク、その他の取締役会のメンバー

スーダンのための水。ジェフリー

写真やビデオ映像を見る機会を与えてくれたミード。

Machine Translated by Google

そしてリンダ•ライトとスー•カッシラー

ブレックファースト•シリアルズ株式会社

ジンジャー•ノールトン氏、デイビッド•バーバー氏、そしてカーティス•ブラウン社の皆様

そしてダイナ•スティーブンソン、

優しく、そしてしっかりと、常に正しい方向へ導きます。